

「TFU 教育フォーラム 2024」

記録集・報告書

2024年12月7日（土）

主催：東北福祉大学教育学部 / 東北福祉大学大学院教育学研究科

後援：宮城県教育委員会 / 仙台市教育委員会 / 河北新報社

目次

概要	1
教育学科長の挨拶	2
教育学研究科長の挨拶	3
第 1 分科会(幼保)	4
第 2 分科会(小学 A)	10
第 2 分科会(小学 B)	15
第 3 分科会(中等社会)	20
第 4 分科会(中等英語)	25
第 5 分科会(特別支援)	29
総括	34
学生実行委員名簿	36
TFU 教育フォーラムのあゆみ	38
編集後記	40

TFU 教育フォーラム 2024 概要

1. 2024 年度テーマ

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」

2. 大会趣旨

近年、社会の有様は大きく変化し、未来は予測困難となってきました。そのような時代に生きる子供たちは、今まで以上に自分のよさや可能性を認識し、また同時に多様な人々と協働しながら、持続可能な社会の創り手となることが求められています。いうまでもなく学校教育のさらなる充実喫緊の課題です。

本フォーラムでは、それぞれの現場において工夫された実践等について話題提供していただき、その上で、近い将来を見据えたあるべき学びのスタイルを模索していきたいと考えます。

3. ねらい

- (1) 卒業生を対象に、日頃現場の中で感じている多様な悩みなどについて、本学教員が中心となり解決の方策を共に探ることを目標に、卒業生のリカレントの機会とする。
- (2) 大学と卒業生及び現職教員との交流を図ることで、現場での課題の解決策を共に見いだす。
- (3) 在校生が保育・教職への理解を深めることを通して、その資質向上に寄与する。

4. 日時・時程

(1) 日時 2024 年 12 月 7 日 (土) 11:30 ~ 16:30

(2) 時程

11:30	12:30	13:00	14:30	15:00	16:30
卒業生 懇親会	受付	開会行事・全体講演 (大教室)	校種(教科)別分科会 第1: 幼保 第2: 小学校 A・小学校 B 第3: 中高(社会) 第4: 中高(英語) 第5: 特別支援		

5. 実施方法

完全対面形式(本学国見キャンパス教室)で実施する。

一層確実な資質・能力の育成を目指して

教育学科長 大西 孝志

本日はお忙しい中、「TFU教育フォーラム 2024」へ足をお運びいただきありがとうございます。

コロナ禍から学校生活が元に戻りつつも、年明けの能登半島地震、猛暑や台風や水害による被害など、予測困難な出来事が依然として続いており、被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。



そのような中、今年度は久しぶりに完全対面形式でのフォーラムの開催となり、ようやく以前の形で参加していただけるようになりました。開会の挨拶を事前録画しないというのも久しぶりのことです。

今年度は「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」というテーマのもと、全体会と5つの分科会に分かれての活発な協議が行われます。

本日のテーマは、令和3年1月にまとめられた「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」の中に詳しく述べられておりますが、急激な社会的変化が進む中で、子供たちが変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え持続可能な社会の作り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成することが学校やわたしたちに課せられた責任であるということです。

本日の参加のみなさんに期待していることは、本フォーラムでの学びを通して、「個別最適な学び」とは何か、「協働的な学び」とはどのような学習形態を指すのか、自分の授業を「主体的・対話的で深い学び」にするためには何をするとよいのか、どんな教材の準備が必要なのかといったことを具体的に考え、他人に自信をもって説明できるようになってほしいと思っています。

終わりになりますが本日の開催にあたり、ご尽力いただきました、助言者、話題提供者、学生スタッフの皆さん、参加くださった皆様に感謝申し上げます、挨拶とさせていただきます。

子どもの意見に耳を傾けること、子どもが尊重し合う学級を作ること

教育学研究科長 朝倉 充彦

「TFU教育フォーラム 2024」にご参加いただき誠にありがとうございます。
ございます。

今年の教育フォーラムのテーマは、昨年と同様「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を目指して」です。このテーマは皆様もご存じの通り、令和3年の中央教育審議会答申の「令和の日本型学校教育の構築を目指して」のサブタイトル「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」に由っています。



この「個別最適な学び」は、「個に応じた指導」を「指導の個別化」と「学習の個性化」を一体的に充実していく概念として設定されています。一方、「協働的な学び」は、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないように多様な他者と協働しながら学ぶことを目指しています。「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、振り返ってみるに、教育における個と集団の問題であり、100年以上も前から日本の学校教育でも大きな課題となってきたものです。令和の今日では、ICTの活用が強調され、それによる「個別最適な学び」を充実し、同じ学校だけでなく空間的・時間的制約を超えた他の学校の子どもの学び合いとなる「協働的な学び」が目指されています。

中央教育審議会答申の目指す方向性については同意できる箇所が多々ありますが、私なりの所感を述べたいと思います。まず、「個別最適な学び」の「最適」についてですが、「最適」と判断するのはいったい誰なのかということについて、答申では明確に語っていないように思われます。（ベターではなく）ベストだと判断するのは教師なのでしょうか、それとも子どもなのでしょうか。私はその判断主体は子どもだと思います。それならば、教師は提供する「個に応じた指導」が子どもにとってベストであるかを確認するためにも、絶えず子どもの意見に耳を傾けながらベストを目指していくべきでしょう。

そして、「協働的な学び」についてですが、多様な他者との学び合いというとき、やはり学び合う他者集団は学級集団が基盤となるでしょう。一つの学級の中に様々な問題や課題を抱えた子どもが、対等でさらに共感しあう関係を持つことが必要でしょう。そうした学級づくりが教師の大事な課題でもあります。「協働的な学び」には、子ども同士が互いに認め合い尊重し合う学級が必要であり、そういう学級づくりが教師の避けることのできない課題であると言えます。

以上、中央教育審議会答申についての私の所感を述べましたが、子どもの意見に耳を絶えず傾けた「個別最適な学び」と、子ども同士が対等で尊重し合う学級をベースとした「協働的な学び」の充実を目指して、本日の教育フォーラムで多くの意見が交換されることを期待しています。

最後に、この教育フォーラム開催のためにご尽力いただいた学生と先生方に感謝申し上げます、私のあいさつとさせていただきます。

第1分科会（幼保）

司会：馬場 彩花 菊池 美玖

参加者 卒業生：1名 在学生：133名 本学教員：8名 計142名

対人援助職としての保育者のあるべき姿 一人的環境に着目して—



今年度の幼保分科会では発達プロジェクトによる「対人関係としての保育者のあるべき姿」や人的環境に着目した研究による発題を起点とし、参加学生との質疑応答とそれらを受けた助言者の大原慎先生のコメント等を受け議論を行なった。

発題の趣旨

保育の環境構成には人的環境、物的環境、社会的環境、自然環境の4つがあり、これらの環境は子どもの成長に大きな役割を果たしている。子どもたちは保育所、幼稚園、子ども園でのさまざまな経験に心を揺さぶられることで、感情が豊かに育っていき、さらには体験したことを話し合っ共有し、喜びを分かち合い、つながり合うことで、自分の体験が仲間に受け止められる経験をすることで、自己肯定感が育っていく。そうした育ちをより豊かなものとする上で、必要不可欠なのが保育者の援助であり、子どもの成長を促すには、保育者の関わりや援助が大切である。プロジェクト内で理想の保育者像について話し合ったところ、子どもの言葉をよく聞き逃さないことや、子どもの声や気持ちを受け止めること、明るい声かけをすること、社会生活のルールを伝えること、対人援助職としての心構えを持つことなどが挙げられた。そして、このような保育者になるためには、子どもたちの年齢別の発達についての理解が非常に重要であると考え、年齢別の心の発達と保育者の関わりに関する文献調査を行った。その上での仮説を受けた助言者の大原慎氏からの問題提起的な事例でさらに再考を行なった。その結果、発達プロジェクト内で考えた理想の保育者像としての関わり方では、必ずしも子どもの姿に寄り添いきることができないことがわかった。子ども一人一人の発達や性格、家庭環境を理解した上で、臨機応変に対応することが大切であると結論づけた。

助言者 大原慎先生からのコメント

発達プロジェクト内で考察した「理想の保育者像」が間違っているのではなく、これらを基盤として大切にしながら、子どもと関わる日々の中で、関係を構築したり、理解を深めたりしながら、そこから関わり方について学び続けることが大切である。理想の保育者像を大切に、軸としてぶれないようにしつつも、学びを深めて専門性を高めていけるような保育者を目指したい。

第1分科会 話題提供

司会：山田 千尋（発達プロジェクト）

話題提供者 泉チェリーこども園保育教諭 大原 慎先生



助言者として参画頂いた大原慎先生は、本学卒業生でもあり、保育園勤務を経て、震災後の被災した方々の心のケアに関する活動に携わる。その後新規園立ち上げや園長を経験後、現職に就き、放課後児童支援員としても勤務の傍ら自主勉強会等を主宰するなど多岐に渡る活動を行っている。

今回は、子どものアタッチメント形成と保育者の関わりの要について理解を深める数々の事例を紹介して頂き、発達プロジェクトの発題を元とした保育実践について会場の参加者と質疑応答等議論が活発に行われた。

質疑の様子

- ・虐待が考えられるときの対応はどうすればよいか

虐待であるかを判断するのは私たちではない。虐待が疑われる場合は、児童相談所や警察に報告をする。虐待が疑われる子どもがいた場合、職場として連携してどう対応していくかが大切になる。気づいたことはそのままにするのではなく、職場内で共有する、伝えることが大事である。何よりもその子の命を守ることが一番重要である。

親が虐待をしてしまう背景を考える。1人で対応するのではなく、組織として対応していく。保護者の苦しさを考え、日常生活の中で子どもに安心安全を与えて、保護者を包んでいく、一緒に協働していくことが必要である。また、虐待の連鎖が考えられる。保護者自身が虐待を経験している場合がある。私たちが伝える言葉は適切かどうかを常に考えて慎重に対応をする。その場だけの対応ではなく、それまでの関係性が築けているから適切な対応ができる。日々の関わりの中で何を大切にするのか、子どもと保護者と関係性が構築できているのか、保護者と本音で語り合える、本気で子どもと向き合える関係性を築いていくことが重要である。

- ・保護者対応について

保護者の何を大切にしたいのか、保護者と話しが合うところ、合わないところを調節していき、信頼関係を築いていくことが大切である。

感想

学び続けることを大切にしている大原先生のご講話を聞き、対人援助職としての保育者のあるべき姿を現場の先生からの視点で考えることができた。今後、保育者の基本姿勢を忘れず、自分の理想の保育者像をしっかりと持ち、学び続ける保育者でありたいと思った。

(3年 千葉 百華・西 彩奈)

第1分科会 発題要旨

「対人援助職としての保育者のあるべき姿」－人的環境に着目して－

21ET030 太田史音 21ET045 小野夏凜 21ET062 熊谷天音 21ET095 佐藤奏羽
21ET104 佐藤月望愛 21ET105 佐藤滯 21ET111 柴田唯 21ET136 高田麻舞 21ET204 山田千尋

1. はじめに

初等教育専攻幼保コースの所属する発達プロジェクトメンバー所属4年生は、保育者になるために多くの講義、演習、実習を通し保育について学んできた。今回、TFU教育フォーラムという学びの機会においてさらに深めたい学びやより理解を深めたいことは何かについて話し合った際、子どもの多様性や個性を認める環境の重要性を確認した。そして、その視点から子どもにとって重要な人的環境である保育者のあるべき姿について具体的に検討を行いたいと思い、今回のテーマ設定に至った。

2. 方法

まず、保育所保育指針での保育環境に関する記述内容や年齢別の心の発達と保育者のかかわりについて整理を行った。加えて、発達プロジェクトメンバーが実習中に経験した2つの事例に取り上げ、そこでの保育者のかかわりについて分析、検討を行った。まず1つ目は、未満児の事例であった。自由遊びの際におもらしをしてしまった子どもに対して、保育者がそのことを否定するのではなく、「おもらしを自分で報告できた」子どもの姿・成長を肯定的に受け止め、肯定的な声掛けを行った事例であった。この事例を通して、子どもに対する肯定的な関わり、さらに、子どもの成長を喜び、その姿と喜びを職員間で共有できる関係性の重要性を確認した。また、もう1つは以上児の事例であった。気持ちが崩れてしまい立て直しが難しい子どもに対して、保育者が個別のスペースをつくりながら子どもを見守り、子どものペースで気持ちの立て直しを促した事例であった。この事例を通して、子どものペースを尊重した関わりとそれを可能にする環境構成の工夫の重要性を確認した。

3. 結果

以上の検討を通して、対人援助職としての保育者のあるべき姿として、個々の子どもに「安心感」を与えることのできる保育者という結論に至った。また、そのための関わりとして、「そばに居ること」「前向きな言葉を掛けること」「肯定する・受け止めること」「スキンシップをすること」「話を聞いてくれること」という8つの関わりが重要であるという結論に至った。

4. 問題提議

以上の結果に対して、本学OBで保育教諭の大原慎先生から事例が提示され、問題提議を受けた。事例の内容は以下のとおりである。

《2歳児》

きっかけとなる場面を確認できておらず、どのような理由で泣いているか分かりません。

そばに近寄り、笑顔で「大丈夫だよ」と言葉をかけて話を聞こうとしましたが、より大きな声を出して泣き、保育者から離れていきました。

再び笑顔で「悲しかったのかな」と気持ちを推察して受け止め、スキンシップを図ろうと側に寄りました。ところが、肩に触れると、触れた手を振りほどかれました。改めて「何があったの？」と話を聞こうとするも、「あっち！（行って）」と怒りつつ、更に大泣きしてしまいました。

この事例は、笑顔での声掛けやスキンシップなど上の「結果」で述べた関わり、さらに言う「安心感」を子どもに与える際に通常保育者が行いがちな行動では状況が改善されない事例であった。大原先生より「この状況や子どもの姿をどのようにとらえると良いのか？」「その後、どのように対応していくのか？」という2つの問いが投げかけられた。この問いに対して検討を行った結果、事例に示された子どもの姿の背景として、本人の特徴や家庭での経験の影響が挙げられた。また、実際の対応としては、「あえて関わらないで見守る」、「保護者の話を聞く」など上の結果で述べた関わり以外の関わりが挙げられた。

加えて、子どもの「安心感」を促すためには、子どもひとりひとりの発達や性格、家庭環境をよく理解したうえで、個々の子どもに応じた関わりをもつことが重要であるという結論に至った。さらに、様々な子どもがいるからこそ、子どもや職員と関わりながら日々学び続けることが出来る保育士も理想の保育者像のひとつであるという結論に至った。

5. 大原先生からのコメント

大原先生より、子どもの感じる「安心感」について、アタッチメントの形成という観点から解説をいただいた。その中で、保育の場においては保育者が重要なアタッチメント対象であることが指摘された。また、子どもの思いや困難な状況に対して敏感であること、一方で子どもとの関わりにおいては敏感になり過ぎないことの重要性について指摘がなされた。

加えて、子どもの気になる姿を理解し保育の工夫を考える際には、その姿が見られた「その時」だけではなく「その前」や「その後」に着目すること、加えて、「その時」の関わりだけではなく、「その前」の関わりや環境構成の工夫を行うことが大切であるというコメントをいただいた。

6. 総括

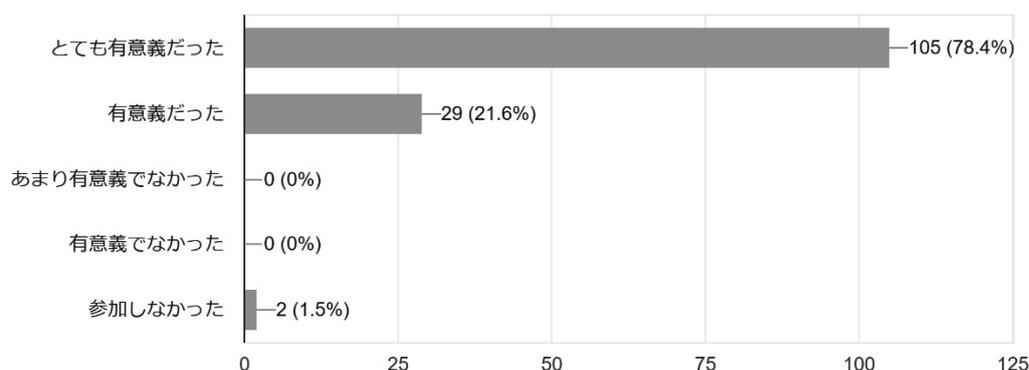
本学教員の平川昌宏先生より、「安心感」は保育において「養護」に関わる重要な内容であり、今回のフォーラムの中で対話を通して検討する機会が得られたことの意義についてコメントがあった。加えて、虐待経験や被災経験など、それまで「安心感」の経験を大きく阻害されてきた子どもが保育現場におり、そのような子どもたちが保育の場で「安心感」を感じられる関わりや環境づくりについて今後も検討が必要であるという指摘がなされた。

第1分科会 アンケート結果

1 発達プロジェクトの発題内容について

発達プロジェクトメンバーによる話題提供の内容について該当するものをお選びください

134件の回答

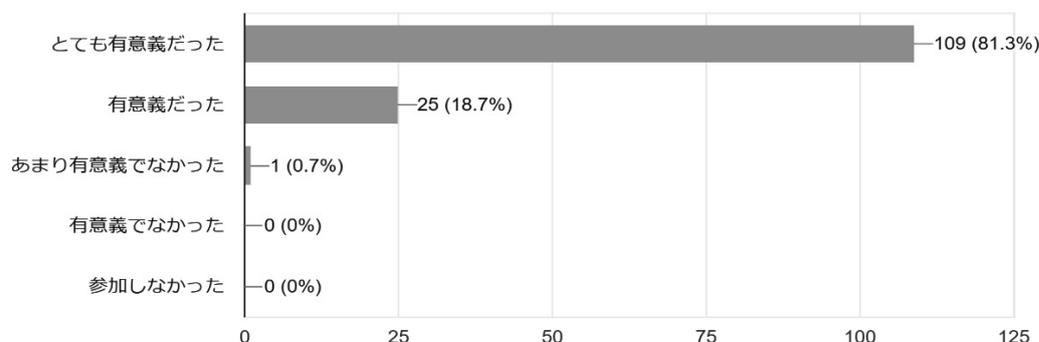


- ・未満児、以上児の事例を通して状況に合わせた環境構成が大切であることや、保育者が安心感を与えることの大切さを知ることができました。
- ・寄り添うのが正しい、受け止めるのが正しい、近くにいることが正しいと思っていましたが、話を聞いて、それだけでは対応できないこともあること、また子どもへの対応はひとつではなく子どもがいる数だけ対応方法があることがわかりました。考察がとても深く、刺激を受けました。
- ・それぞれ理想の保育者像を持つ中で、基盤としてあるのは「安心感」であり、私自身のなりたい保育者像とは何かを考え直すきっかけになりました。また、理想の保育者になるために、基盤として自分の中で軸としてぶらさずに、日々学び続けなければならないということに対して、とても印象に残りました。

2 助言者からの内容について

大原慎先生お話の内容について該当するものをお選びください

134件の回答

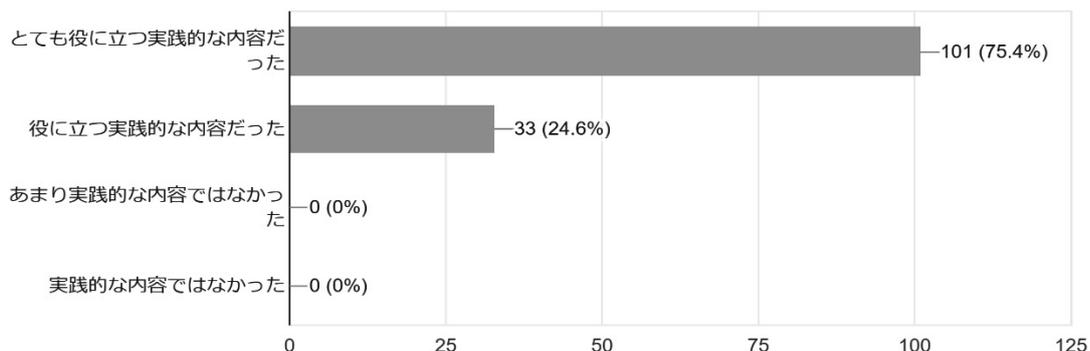


- ・ 感性という言葉を初めて聞き、子どもに感性に対応することの大切さやしすぎないこと大切さを初めて学ぶことが出来た。
- ・ 保育における感性を高める必要はあるが、先回りしすぎて経験させるべきこともさせられないということはよくないということを学ぶことができた。
- ・ 子どもが感じたことの言語化の大切さを改めて感じました。子どもが感じているけれどなんて言ったらいいかわからない、そんな感情を保育者として受け止めて言語化することでその子の表現の幅が広がるのだと思いました。
- ・ 子どもが逃げ込める場所を予め作っておく、という考えがとても勉強になりました。その時その時の対応だけでなく、日頃からあるべき環境を作ることによって子どもの安心感に繋げることができるというお話が、とても勉強になりました。
- ・ 問題が起きた時に対応しようとしてしまいがちだが、問題が起きる前後を見ることが大切だということが非常に勉強になった。改めて日々の振り返りと改善が保育にとって必要だと感じた。
- ・ 理想の保育者像はこれから保育の現場に出た時に土台になるというお話がとても印象に残りました。今自分が持っている理想の保育者像も今後変わっていくものだと思いますが、今大切にしていることを今後も忘れず、子どもたちと関わる時に活かしていきたいです。

3 教育・保育現場で役立つ内容だったか

今回のフォーラムは保育現場で役に立つ内容となっていましたか

134件の回答



- ・ 感情の言語化の大切さ、集団だけでなく集団の中にいる個にも注目すること、落ち着けるスペースを事前に作ること
- ・ 子どもの対応のみでなく、前を捉えること、後を改善出来ることが大事だということ。保育者の手を離れて遊んでいる途中でも、保育者の見守りを求めているということ。やればできる、だけではなく、どうしても出来ないことがあることを理解して関わることの大切さ。
- ・ 集団を見る中でも子どもたち一人一人に目を向けて配慮すること。子どもたちに対して簡潔な言葉掛けや指示を意識すること。困った子ではなく困っている子という捉え方で子どもと関わること。

<第2分科会(小学A) 報告>

司会：長沢 碧月、金崎 史晟

参加者 卒業生：7名 在校生：61名 本学教員：2名 計 69名



1. 井上 姫榛先生(2023年度卒)

教員になってから1年目の先生で「個別最適な学びの視点からみる学習意欲向上の手立て」というテーマでお話していただいた。

今回は算数の九九の単元で自由進度学習を取り入れた授業について話した。この方法によって子供一人一人にあった授業がすることができる。子供たちの学習の変化は、算数が苦手な児童は、目標を決め達成できたことへの喜びや達成感があった。問題の難易度に物足りなさを感じてい

た児童は、応用問題があることによって、問題にどんどん挑戦し、学習の意欲が高まっていた。最後に自由進度学習を行う上で、授業の内容研究が大切だと語った。

質疑の様子

「児童のやりたいこと、やれないことを決めるのはどうするか。」という質問に対して、井上先生は今回の授業の例でもあった九九では、3の段までを全員ができるようにする。基礎ができてから、一人一人にあったレベルを徐々に上げていくようにすると話した。



2. 三橋 亜未先生(2016年度卒)

教員になってから8年目が経過した。今回は「複式学級における学びの深まりを目指して」というテーマでお話していただいた。

今年度から1・2年生の複式学級の担任をしている。複式学級では直接指導と間接指導の2つの指導を組み合わせている。2つの指導法により子どもたちは他学年との交流が盛んであり、距離感が近い印象がある。また児童が主体となって活動に取り組む場面が多々ある。そのため発表

の話型の直接指導や活動に応じたガイドの作成を丁寧に指導し、繰り返し指導をする。複式学級は児童1人1人を長く見ることができるので、児童の成長を肌で実感できると語っていた。

質疑の様子

「複式学級にしていることで環境の整備に工夫していることはあるか。」という質問があった。三橋先生は「掲示物を使ってめあてや予定を形式化しており、次何をしたらいいのか可視化している。また先生がいない中、授業中に困った場合には児童たち同士教えあうように指示したり、別の教室で授業している場合でも止まっていると感じたら手助けに行ったりしている。児童には後で教えるから安心してねと伝えている」と話していた。

感想

今回の講話で個別最適な学び、複式学級について学ぶことができた。自由進度学習という授業が児童一人一人に合った授業をすることで最適な学びについて詳しく知ることができた。また複式学級は単式学級とは異なる指導法、児童との関わり方を知ることができた。個別最適な学びも複式学級での学びも児童が主体的となって課題に取り組むことが求められていると学んだ。

(3年 及川 翔太、滝田 敬大)

<第2分科会 小学校A 発表No.1>

個別最適な学びの視点からみる学習意欲向上の手立て

井上 媛捺（山形県・山形市立第五小学校・令和5年度卒）

1. 実践の背景

山形市の教諭として採用され1年目となる現在、私は2年生の担任をしている。2年生の子供たちは知的好奇心に溢れており、様々なことに興味をもちながら学校生活を送っている。一方で、まだ低学年ということもあり、興味の移り替わりが早いという側面もある。また、学びのペースや得意な学び方についても一人一人違っていることから、子供たちが主体的に学習に取り組めるようにするために、今回の授業研究では单元内の一部に自由進度学習を取り入れ、学習を進めていくこととした。

2. 実践の方法・内容

選んだ单元は、2年生算数の「かけ算（1）」である。「個別最適な学び」や「協働的な学び」の一体的な充実については教員間でも学び合いが行われており、今回の授業研究を進めるにあたっては、助言をいただきながら進めていくこととなった。单元内自由進度学習を、九九を構成する部分で取り入れるにあたって、以下の3点に留意している。

- ①子供たちが、自分に合った取り組み方を選択できるようにする。

子供たちが学びを進めていく中で、自分に合った学び方で九九を構成していけるように、プリントを複数枚用意した。棚からプリントを選び、プリントに取り組み、課題と向き合う時間や課題の学び方を自分なりに選択することを通して、自分に合った課題の取り組み方を学ぶ機会とする。

- ②課題の解決に必要な知識や技能を活用できる機会を設け、乗法への理解が深まるようにする。

乗法の意味理解や乗法に関して成り立つ性質に関心をもつことについて、单元前半に全体で学習する時間をとったり、自由進度学習の中に学習したことを活用させる機会を設けたりするなどして、学習内容の確実な習得を図る。自由に進めていくプリントの中に、2とび、5とび、累加、交換法則、分配法則の考え方が必要となる課題を混ぜ込むことで、子供たちが理解を深めていけるようにする。

- ③子供たちの疑問や興味があることを題材に組み込み、主体的に取り組めるようにする。

受動的な学習になってしまわないように、子供たちが興味をもちそうなことを題材に扱ったり、子供たちの中から生まれた疑問を前半部分の学習の中から見取って課題を設定したりするなどして、主体的に学習に取り組めるようにする。

3. 考 察

【この单元を通して期待する子供たちの姿】

单元前半で身に付けた知識や技能を活用して九九の構成に挑戦していく中で、自分の得意とする学び方を見つけ、様々な方法を試しながら粘り強く課題を解決しようとする姿が見られることを期待する。

複式学級における学びの深まりを目指して～40人学級の経験を基に～

三橋 亜未（青森県・八戸市立種差小学校・平成28年度卒）

1. 実践の背景

令和3年に「令和の日本型学校教育」の構築を目指す中央教育審議会からの答申が出され、一人一人の学びを尊重しつつ協働する力を育む教育が目指されている。複式学級は児童数が少ないことで個々に目が行き届き、細やかな指導は行いやすい一方、環境上多様な他者の考えを組み合わせるよりよい学びを生み出す協働的な学びの充実に課題を抱えている。将来様々な人々と関わることになる児童に、まずは1・2年学級で自分の意見を伝えて友達の意見を受け止めること、そして自分たちが主体となって物事を進めることを経験させたいと考えた。そこで、複式学級における教師主導の「直接指導」と児童が自分で学習を進める「間接指導」の場面を生かし、自分の考えを深めることを目指す実践を行った。

2. 実践の方法・内容

①発表方法の定着と振り返りの価値づけ

主に国語の学習において、直接指導で発表の話型を確認した後、間接指導でペアを変えて繰り返し発表させた。次の直接指導では発表の振り返りを述べさせ、新たな考えに気づいたり自分の考えが変わったりした発表に価値づけする言葉がけを行った。

②ガイド学習による間接指導の充実

間接指導において、児童1名が進行表に従って活動をすすめる「ガイド学習」を行った。『話合いの結果をまとめ、次の直接指導までに話せるようにする』など、自分たちでやることを明確にした。直接指導時に話合いの内容を焦点化するための手立てを講じ、間接指導時の活動の充実を図った。他に、漢字学習や振り返りを進めさせるなど、活動内容ごとの進行表を準備し、次に指示する内容が誰でも分かるようにした。

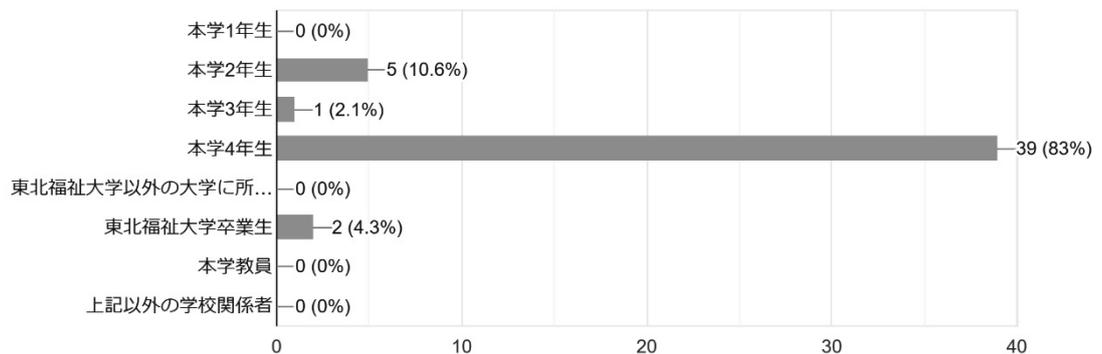
3. 考 察

(1) 自分の意見を話すことに自信がつき、友達との対等な関係づくりが実現している。日ごろからお互いの意見を交換し合う経験を積むことで、問題解決へ向けた柔軟な発想が生まれたり、友達の感じ方に対して共感したりできるようになっている。

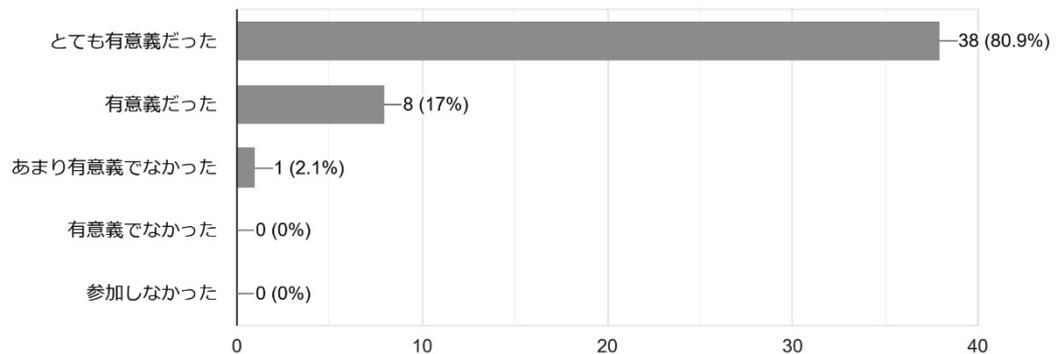
(2) 教師との距離が保たれ、自分たちで考える力が身についている。教師が一人一人の苦手や困難を把握しつつも、話合いの態度を育成したり直接指導と間接指導の場面における活動内容を吟味したりすることで、間接指導でも児童たちが学びを継続することができる。自力解決につなげる手立てを講じることで、自分たちでできる実感をもたせ、友達との助け合いが自然にみられるようになっている。

小学校第2分科会 アンケート結果

<1> 現在のご所属・職業等についてご回答ください
47件の回答



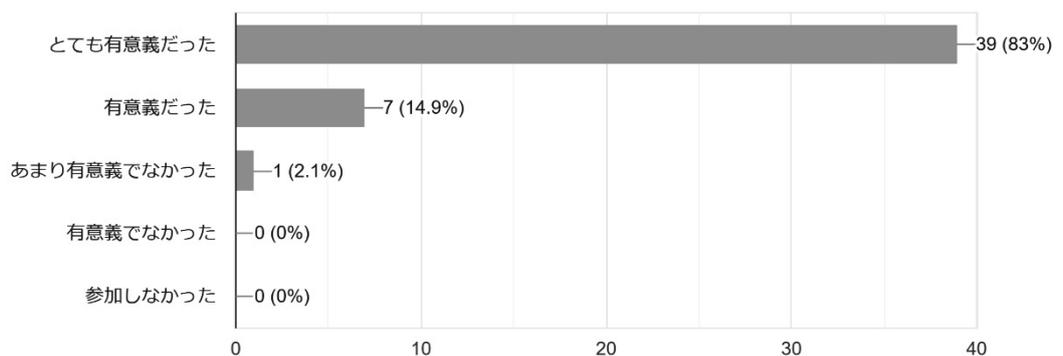
<2> 全体講演について該当するものをお選びください
47件の回答



<ご意見>

- ・私たちが学生だった時と現在の様子は全然違うことを改めて理解しました。また、教科書にない学びをどれだけ子どもたちが知識を蓄えることが出来るかは先生の力にかかっていることを学びました。
- ・子供を主体とした授業運営について、実際に現場に立たれている先生方の実践例などを通して授業のやり方の知識が身につきました。
- ・今の教育に必要なこと、やるべきことを改めて再確認できました。大西先生のお話は、教員だけでなく社会人になってからも役立つお話だと感じました。

<3> 卒業生の話題提供・実践発表の内容について該当するものをお選びください
47件の回答

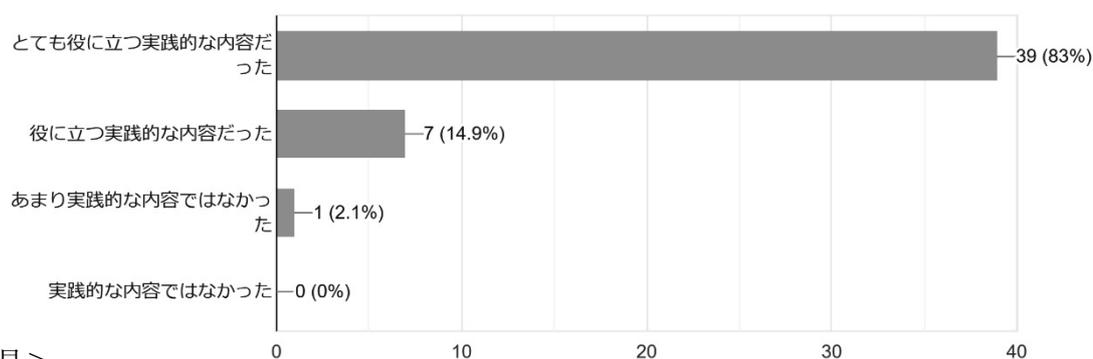


<ご意見>

- ・自由進度学習や複式学級について学ぶことができた。私も将来そのような環境で授業を進めていくかもしれないので、その際は今回の学びを活かしたいです。
- ・教師は伴走者であるという言葉が印象に残りました。答えを教えるのではなく、やり方を提示するという考えを、教師は大切にしていかなければならないと感じました。
- ・自由進度学習のメリットや、課題等が明確に見えて、実践してみたいと感じられました。また、複式学級についても、今までどういった指導をしているのか想像もつかなかったが、実像を知れて良かったと思いました。また、普通学級でも使える手法があり、落とし込んで活用していきたいと考えました。
- ・複式学級については、[直接指導・間接指導・わたり・ずらし]が重要なポイントだと分かりました。また、ガイド学習のように児童が必然的に先導する役割を担うことは今後の勉強以外の面でも自信になり、活かせると感じました。
- ・卒業生のようなカッコいい教員になりたいと憧れを抱きました。発表から、知らないことをたくさん学べて、これからも続けて欲しいなと感じています。

<4> 今回のフォーラムは教育現場で役に立つ実践的な内容となっていましたか

47件の回答



<ご意見>

- ・四年生になって初めての参加だったが、ためになることをたくさん学べて、一年生から来ていたらもっと学べていたかもしれないと感じました。フォーラムの分科会で、気になったところがたくさんあったので、一つだけでなく気になったところに何箇所も行けるようにして欲しかったと感じました。
- ・グループディスカッションの時間は20分ほど取っていただけると、考えをさらに深めることができると感じました。
- ・来年から教壇に立つにあたり、自分自身の教師像をより明確にできる貴重な機会となりました。子どもたちを主体にした教育とは何か、教員になってからも周りの先生方から学び続ける姿勢を大切にしたいです。
- ・全体講演と分科会を通して、教育の課題や学習や学級の形式について、自分の知らないことがたくさんあったので、これから自分でもそういったことを学びたいと思いました。

<第2分科会 小学校B 報告>

司会：上條 晴夫教授 総評：山下祐一郎

参加者 計 57 名

1. 清野 弘平先生 (2016 年度卒)



清野先生は、教師生活9年目での子どもたちの個別最適な学びの授業形態について取り上げた。清野先生は「授業を一時間で完結させるのではなく、教師と児童にとってゆとりのあるものにしていく」ことが重要であり、実践している算数の授業では単元の始まりに大まかな基礎知識を一斉指導で身に付けさせ、そこから手放し自ら課題を見つけていくといった指導方法で、子ども主導で進められる授業形態が個別最適な学びに繋がると語った。

質疑の様子

「こういった授業形態でどうしてゆとりが生まれるのか、詳しく知りたい」という質問に対して、1～4時間目はメインとなる5～8時間目に向けて力を付けられるような一斉学習を行うため、大まかに教えて、大まかに個別に学習し、まとめるという一連の流れがゆとりを持つ学習につながると語った。また「その他の教科でも実践できるか」という質問に対して、算数以外に国語、体育などの授業でも個別最適となる自由進度学習を取り入れており、その他社会や理科でも利用することは可能であると話しした。

2. 高橋 恵大先生 (2016 年度卒)



高橋先生は「感情と学びの相互作用」というテーマから一人一人の好きなスタイルで学習できる自由進度学習について語った。子どもたちが自ら学習したいと思えるような環境を作り出すことが大事であり、その過程でアイスブレイクなどの様々な取り組みを行い、教室の雰囲気を和やかなものにしていくことが大変と語った。また、各教科を子どもたちが教える教科プロジェクトについては、子どもが授業を自分事として捉え、教科書を丁寧に読むようになるきっかけとなると語っていた。

質疑の様子

「アイスブレイクの頻度やどんな内容の取り組みを行っているのか」という質問に対して、「アイスブレイクは、一年間かけてじっくりと行ったほうが良い。子ども同士のもめごとは、毎日起こるのでそれを解決するためでもあり、たまにゲーム的要素を入れると、子どもたちが喜ぶ」と語った。次に「教科プロジェクトの教科はどのように決めているのか」という質問に対して、「自分が興味を持っている教科や得意教科などで選別する。教材研究の時間は授業内では確保せず、休み時間や放課後に子どもたちが自主的に行うことによって、授業の内容に興味をもってくれる」と語っていた。

感想

二人の現役の先生による授業実践には、子どもたちにどのように育ててほしいか、どんな力を身に付けさせたいのか明確に意味があり、また今回のテーマとなる「個別最適な学び」というのは個々の実態などに合わせ変化していくものであると改めて感じた。 (3年齋藤 耀志、中田 遼聖)

<第2分科会(小学校B)>

自走する子どもを育てる個別最適な学びの創造

清野 弘平(宮城県・七ヶ浜町立亦楽小学校・2016年度卒)

1. 実践の背景

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」(文部科学省2022)では、『2020年代を通じて、実現すべき令和の日本型学校の教育の姿は①個別最適な学び②協働的な学びの2点である』と示している。この2つの学び方に共通しているのが、子ども自身の「学ぶ力(自走する力)」を重視している点である。その力を育てるために、以下の視点を意識して実践を行った。

<視点1> 自走するために必要な知識や技能の明確化

<視点2> 教科の特性や学習内容に適した学習形態や学習計画の工夫

2. 実践の方法・内容～6年算数「分数をかける計算を考えよう」の授業実践を通して～

○本単元の目標(全7時間)

- ・分数の乗法の概念を理解し、計算の仕方について面積図を用いて考える力を養う。
- ・分数の乗法の概念を理解するとともに、分数の乗法の計算ができる。

○本単元における視点を踏まえた手立て

<視点1>

- ・単元を通して「面積図」を活用することで、分数の乗数の概念の理解を図る。
- ・単元計画表を児童と共有することで、子ども自身も「何を学ぶのか」を明確にする。
- ・全時間の終末場面で振り返りを書かせることで「何を学んだのか」を意識させる。

<視点2>

- ・非構成的な学習形態で学習することで、子どもの自己選択の幅を広げる。
- ・子ども一人一人の学びの進度を入力する「座席表」をタブレットで共有することで、「孤立した学び」になることを防ぐ。

3. 考察

本実践を通して、自身が学んだことは以下のことである。

- ①教材研究を通して、どんな学力や資質・能力を育てたいのかを明確にすることで、授業の質を高めることだけでなく、教師自身が教科の特性に対する理解を深めることにつながった。また、1時間ずつに教材研究をするよりも単元を通して教材研究をする方が時間を短縮でき、働き方改革にもつながった。
- ②自走する子どもを育てるには、2つの力を指導することが大切であると感じた。1つ目は、基本的な知識や技能を定着させることで、学びの土台となる「学力」である。2つ目はどんな考え方やツールを使って学ぶのか、どういった環境で学ぶのかなどの「学習力」である。この両輪を意識した指導が自走する子どもを育てることにつながると考える。

<第2分科会(小学B)>

発表主題 感情と学びの相互作用

副題 感情に寄り添う授業づくりの実践

高橋 恵大(宮城県・仙台市立市名坂学校・2016年度卒)

1. 実践の背景

文部科学省の教育振興基本計画では、生徒が安心して学べる「ウェルビーイング」の重要性が強調されている。自己肯定感や他者との協調性を育むことが、学習意欲の向上につながり、いじめや不登校の防止にも寄与するとされる。生徒が心の安定を感じながら、感情を自由に表現できる「安心の土台」を築くことが、充実した学びの環境を整えるための基盤である。

2. 実践の方法・内容

・感情カードの活用

6色の感情カード(青、オレンジ、緑、紫、黄色、赤)から直感で選び、色に込められた感情(例えば青なら「冷静」、黄色なら「喜び」など)を言語化して選んだ理由を隣の人と共有する。これにより、自己や他者の感情への理解が深まる。

・アイスブレイクの実践

子どもが感情を表しやすくするため、場面に応じてアイスブレイクを活用した。感情を引き出す活動や緊張を和らげる活動を通して、子どもが安心して学びに参加し、互いの考えを受け入れる場を整えた。

・振り返りの時間の設置

感情を言葉で表現する振り返りの時間を設けた。生徒が自分の気持ちを言葉にし、活動で得た感情や気づきを共有することで、次回の学びへの意欲を高める機会とした。

3. 考察

(1) 感情カードによる自己理解と安心感の醸成

感情カードの活用を通じて、子どもは自分の気持ちを表現し、他者の感情への理解が深まった。こうした共有が安心感を生み、積極的な学びの姿勢につながった。感情を言語化することで、自己理解が進み、学びに対する基盤としての安心感が醸成されたと考えられる。

(2) アイスブレイクによる感情表現の促進と協調性の向上

アイスブレイクを活用して感情を引き出すことで、子ども同士が自然に他者の考えを受け入れやすい雰囲気生まれ、学びが広がった。また、緊張感を和らげることで、クラス全体の協調性も高まり、安心して発言できる学習環境が整った。

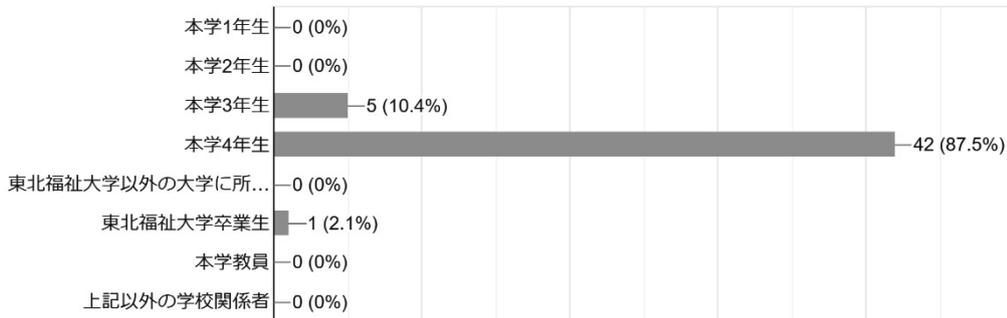
(3) 振り返りによる自己認識と学習意欲の向上

振り返りの時間で感情を言葉にすることにより、子どもは自分の感情と学びの関係を認識できた。この振り返りが自己認識を深め、次の学びへの意欲を高める機会となり、自己成長を促す助けにもなった。

小学校第2分科会（B会場）

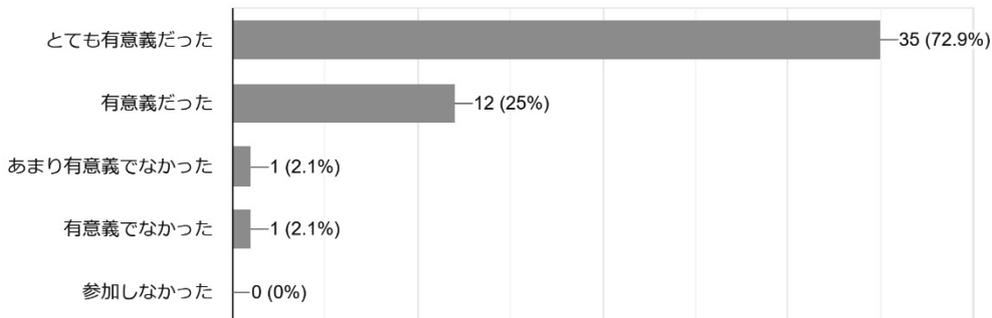
現在のご所属・職業等についてご回答ください

48件の回答



全体講演について該当するものをお選びください

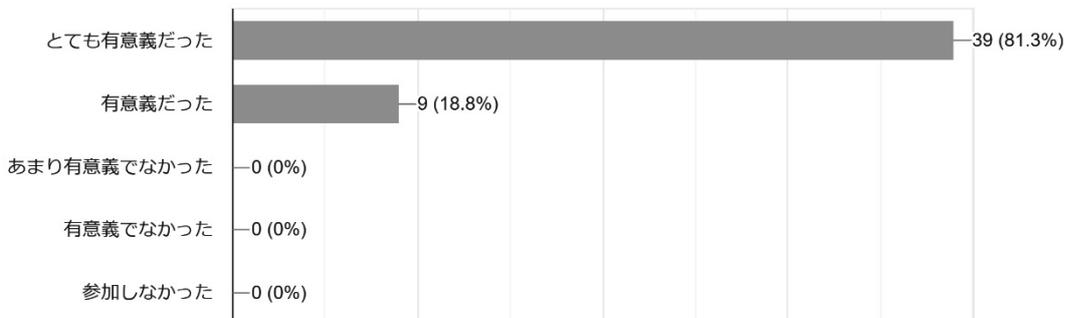
48件の回答



- ・ 学校現場において多様性の理解をどのように子どもたちに伝えていけばよいのか学ぶことが出来た。
- ・ 大西先生の講義を聞き、個別最適な学びや協同的な学びにおいては基礎基本が大切であることを改めて実感しました。また、言語概念において、子供たちへの指導の中で、言葉と経験を結び付ける指導が必要であると感じました。
- ・ 個別最適化のことについてとても学びました。
- ・ 大西教授の経験と学びを繋げるといふ部分が、こうだからこうやって！じゃなく理論を通じて学べると感じた。
- ・ 身近なドラマなどから話が広げられてとても分かりやすかった。
- ・ 個別最適な学びとは何かを学ぶことが出来ました。

卒業生の話題提供・実践発表の内容について該当するものをお選びください

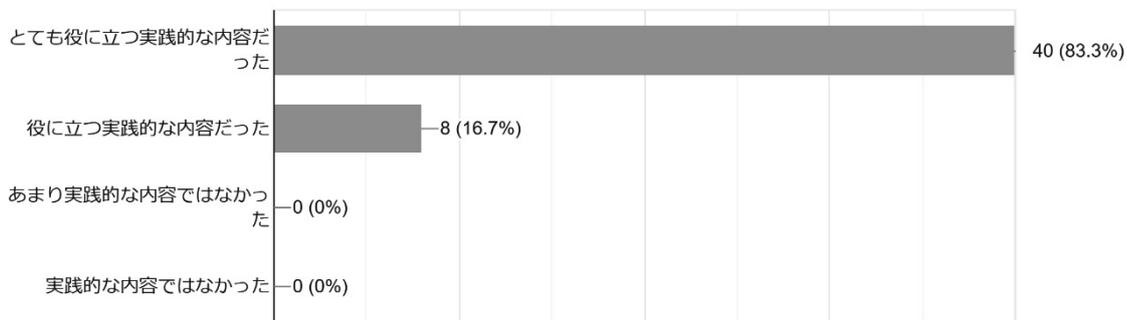
48件の回答



- ・ 対話的・協働的な学び、個別最適な学びの基盤となる授業づくりや学級の雰囲気づくりの大切な点について知ることができた。
- ・ 先生方の学校での取り組みや、指導する上で大切にしていることについて実際に聞くことができ、とても貴重な時間でした。
- ・ 御二方の実践を元に、そしてこれから教員を目指し、教壇に立つ私たちの気持ちを考え作成してくれたプレゼン資料や言葉がとてもよかった。いつの間にか話を聞き入っていました。私にとって深い学びに繋がりました。
- ・ 研究授業などではなかなか見られないような、単元全体の流れや学級経営などの詳しい内容を知ることが出来て、とても良かったです。
- ・ 普段の講義では得ることの出来ない知識や技術を得ることが出来ました。
- ・ 現職の先生方が現場で実践している指導・支援の策、授業づくり、学級づくりについて知ることができた。今後の参考にしつつ、自分自身の授業や指導を見つけ、実践していく意欲が湧いた。
- ・ お話の内容ももちろんたくさん勉強させて頂いたのですが、先生方のお話の仕方や、パワーポイント作り方などからも学びが多くありました。第一にことどものことを考えているということ、そこから自分の大切にしたいことを繋げてお仕事をされている姿をみて自分もそのようになりたいと思いました。私は人前で話をするについて悩んでいることがあったので、お話の仕方を真似するところから始めて、子どもたちに上手におしえられるように頑張りたいです。本日はありがとうございました！

今回のフォーラムは教育現場で役に立つ実践的な内容となっていましたか

48件の回答



- ・ 来年から教師になる身として、教師として求められる能力や、授業のあり方、学級経営のこつを学ぶことができた。
- ・ 先生方から教えて頂いたことを忘れず、これから教員になる際に生かしていきたいと思います。
- ・ このような機会を設けて下さりありがとうございます。そして4年生全員参加の意味が分かる内容でした。
- ・ 卒業生の話を実際に聞いて、授業づくりなど自分なりのオリジナルを持っていることが分かりとても良かった。私が実際に教壇にたった時、先輩方のように自分なりのやり方を見つけて出来るように、頑張りたいと思う。
- ・ 教員を目指す立場として参加してよかったなと心から感じました。
- ・ 新たな発見や考え方、視野が広がる、とても有意義な時間でした。

<第3分科会（中等社会） 報告>

司会：川口 輝

参加者 卒業生 6名，一般 1名，在校生 54名，本学教員 7名，計 68名



1. 笹川 ひかり先生（令和4年度卒）が勤務される千葉県立幕張総合高等学校は、生徒数約2200名で単位制を取り入れていることから、授業の際、生徒同士が面識のない場合もあり理解度に差が出やすい。そのため、ペアワークを多く取り入れていることや、クラス担任との連携により、生徒の実態を考慮した席替えを行ったことについて話題提供された。

質疑の様子

日々の授業づくりで心がけていることは何かという質問に対して、生徒に対しよりよい発問を意識していると返答された。また、知らない者同士であっても生徒対生徒の交流にこだわるのはなぜかとの問いには、教員の意見を押しつける授業ではなく、生徒間でさまざまな意見を聞き合うことが大事だと考えていると回答された。生徒からの多様な意見を引き出した発問例としては、平等権や自由権について考える授業での、男女の性別に関する裁判の判例を切り口とした問いについて紹介があった。



2. 鈴木 彩乃先生（令和3年度卒）は郡山市立守山中学校に勤務しておられ、「個別最適な学び」と「協同的な学び」のための授業づくりや教材化への取り組みについて報告された。公民という科目の特性を活かした授業実践では、新聞や博物館など地元ならではの資料を使い、生徒たちが自分事として捉えることができるよう工夫していることをお話された。

質疑の様子

思考ツールを利用することで生徒の成長を実感したことはあるかという質問には、授業直後に会話が広がっていることや、授業の前後で考えが変わったことを言語化できている生徒もいると回答された。また、特別な支援が必要な生徒への支援はどのようにしているかとの問いには、必要に応じてテキストの写真部分をモニターで拡大表示することや、漢字にルビを振ったりなぞり書きができるプリントを渡すこと、触れる実物資料を用意すること、ペースを一人ひとりに合わせて変えるなどの具体例が示された。

感想

個々の生徒の実態に合わせた授業を心がけていらっしゃることに関心を持った。また、今後の課題とされた、「生徒同士で教え合い、高め合える関係を育む」ことについては、話し合い活動を毎回導入することで実現できるのではと感じた。（3年 佐藤 諒・岡崎 克祐）

主体的な対話による個別最適な学びへの取り組み
笹川 ひかり（千葉県立幕張総合高等学校 教諭・令和4年度卒）

1. 実践の背景

勤務校の教育課程上、2・3年生は履修する選択教科に合わせて教室を移動し、講座を受講する。各学年の生徒数が非常に多いため、受講する講座によっては周囲の生徒と面識のない場合もある。また、勤務校の生徒は、授業だけではなく部活動にも力を入れている者も多いため、生徒によって理解度が異なりやすい。

本発表では、研究授業の実践報告や研究授業の反省を踏まえた現在の授業での取り組みを提示し、第3分科会のテーマである「公民的分野における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」について考えていきたい。

2. 実践の方法・内容

①毎回の授業でのペアワークの導入

担当している講座を受講する生徒は、週に90分間だけしか集まらないため、隣席や前後の席の生徒同士による交流を取り入れることで一緒に学ぶ仲間意識を持たせた。

②授業における進捗状況の明確化

小さい黒板に本時の流れを記入し、現在取り組んでいる活動の隣にマグネットを貼って授業の進捗状況を示した。

③生徒の実態を踏まえた座席の設定

①での活動に慣れたタイミングで、生徒の理解度、発言の内容など机間指導の中で授業者が得た気付きや、受講生徒が属するクラスの担任との連携で得た情報を基に、生徒の実態を踏まえて座席を変更した。

3. 考 察

(1) 対話による深い学び

毎回の授業で話し合う活動を取り入れることで、相手の意見に耳を傾ける姿勢は形成できていたと感じている。しかし、深い学びに関しては、教員が提示した発問の質、教員による指示の明確さによって差異が生じた。教員が提示した発問の質に関しては協働的な活動の成果にも関係すると感じる場面が多くあった。

(2) 個別最適な学び

研究授業ではすべての個別最適な学びを行き届かせることができなかった反省から、2-③に示した座席の設定を考えた。教員1人での個別最適な学びを提供する難しさから、現在では生徒の力を借りながら個別最適な学びを進めている。お互いが教え合い、高め合える関係を育むことが今後の課題であると考えます。

中学公民の授業から考える「個別最適な学び」と「協働的な学び」
鈴木 彩乃（福島県・郡山市立守山中学校 教諭・令和3年度卒）

1. 実践の背景

勤務校3年目で初めて公民分野の授業を担当することになった。生徒に「教える」のではなく、生徒と同じ視点で「世の中を知る」「一緒に学ぶ」ことを意識しながら授業をつくることを意識している。今年度は自民党の総裁選から衆議院解散、総選挙と時事的な事象を授業で取り扱う機会に恵まれた。また、郡山市では、一人一台タブレット [iPad] を貸与しており、学習支援ツールとしてロイロノート・スクールを導入している。授業での学びと実生活の結びつきが実感できるようにするためにも、ICT を活用しながら多様な学習形態・方法を取り入れたいと考えた。

2. 実践の方法・内容

【事例1】選挙の課題と私たちの政治参加

本授業は、今年度の福島県中学校教育研究協議会(県中・県南大会)社会科部会において実践された授業をもとに行ったものである。全2回の授業で、日本における選挙の問題点について課題意識をもたせ、政治参加への動機づけを図った。

【事例2】マスメディアと世論

本授業では、同日発刊の全国紙(朝日新聞・読売新聞)と地方紙(福島民報・福島民友)を読み比べ、相違点をベン図にまとめる活動を行った。NIE(Newspaper in Education)の導入は社会参画への意欲を育み、主権者教育の軸になる。

【事例3】日本国憲法と個人の尊重

本授業では、基本的人権にはどのような権利があるか確認をし、その後タブレットを用いて平等権・自由権・社会権・参政権のいずれかを選択してもらい、調べる活動を行った。調べてまとめた内容は、その後の授業の導入部で活用した。

3. 考察

(1)大会・分科会のテーマについて

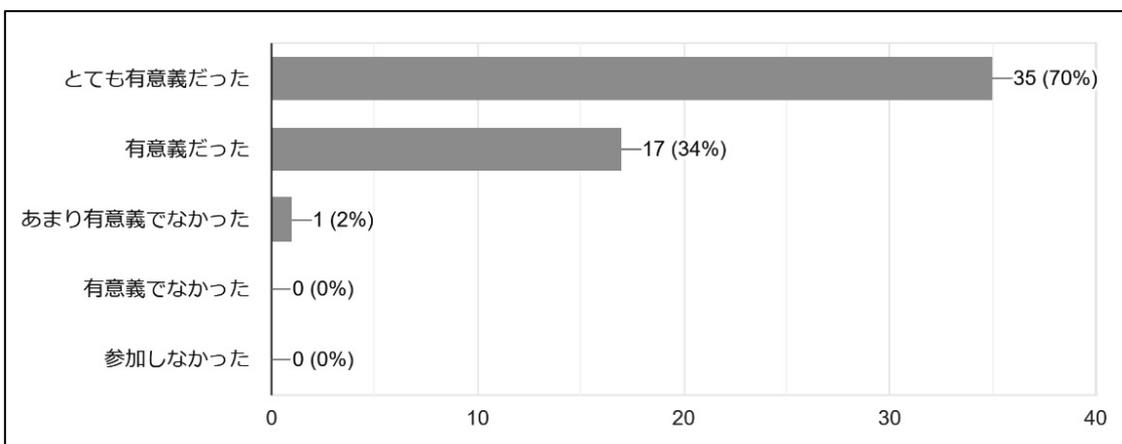
学校にいるからこそできる「協働的な学び」は推進されている一方、「個別最適な学び」は授業でどのように行うか課題が多いように感じていた。実践を通して、一時間の中で全てやろうとするのではなく、単元全体や次の単元など見通しをもつことで、より効果的な学習方法を取り入れることができた。発達段階や学習場面等により、それぞれの学習方法の良さを適切に組み合わせて活かしていくことが重要だと考える。

(2)今後の課題

公民分野で学ぶべきことは、社会とともに変化する。特に、中学3年生は高校入試を見据えて知識の定着を優先し、つい授業が駆け足になってしまう。生徒も多様化している現状を踏まえて、どのような学習活動であっても、誰一人取り残さないためにどうすべきか模索しながら、生徒一人ひとりの良さが見えてくるような授業をつくりたい。

<第3分科会 アンケート>

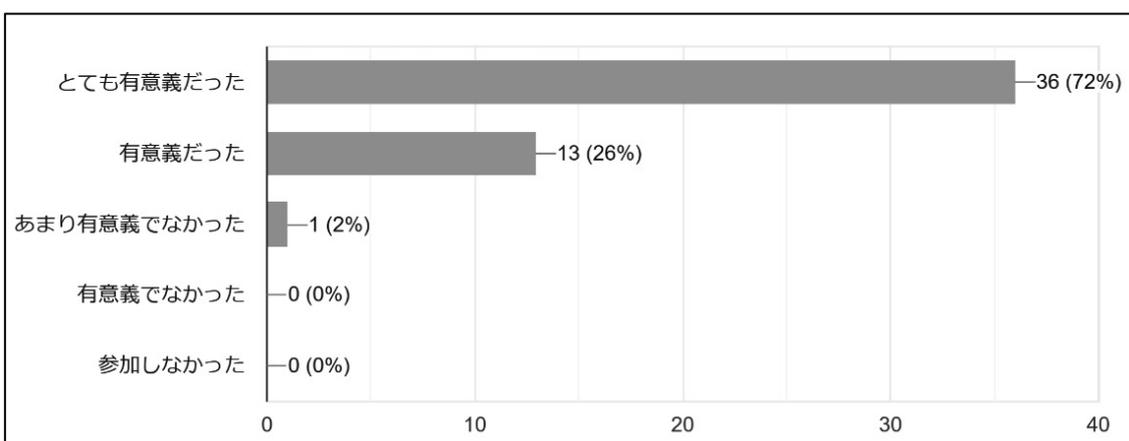
1 全体講演について



<ご意見>

- ・個別最適な学びや協働的な学びの実践を聞いて、自分の実践に活かしたいと思った。
- ・自分が授業の中で何にこだわりたいのかをもう一度考えなければならぬと気が引き締められました。
- ・現在の教育現場を取り巻く環境、基礎的な指導の大切さを実感することができた。
- ・特殊教育時代からの特別支援教育の変遷、現代の支援を要する子供の割合などが組み合わせられており、新しい支援の形が求められていることがよくわかる講演でした。
- ・これからの教育に必要なことを考えるいい機会になった。
- ・配慮について考えさせられる内容だったと思う。

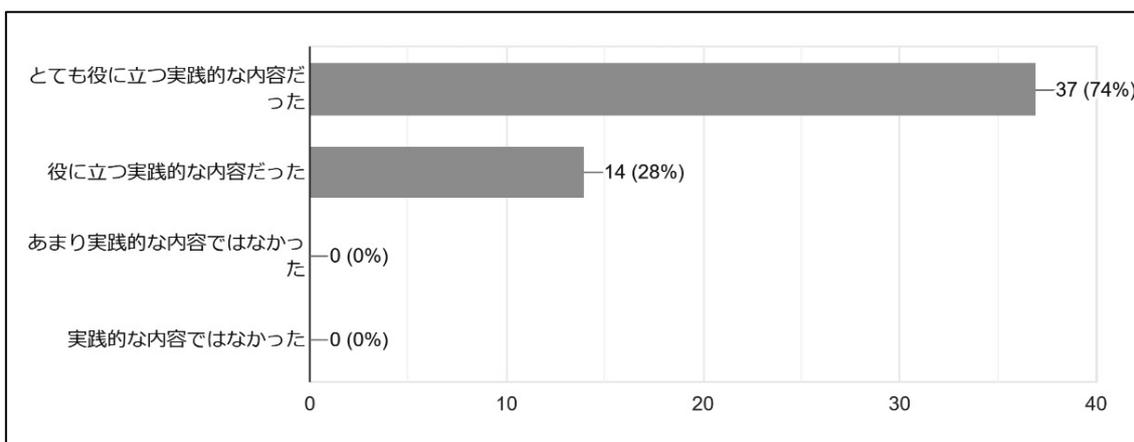
2 卒業生の話題提供・実践発表は有意義だったか



〈ご意見〉

- ・私が実習の検討会で問われ、答えられなかったことの解答をいただくことができました。本当にありがとうございました。
- ・中学生や高校生の実際の姿を知り、その上でどのような授業を構成されているかを知ることができた。またその時にどのような工夫や配慮をしなければならないかを学ぶことができた。
- ・教員歴の浅い、自分と近い経歴の先生が日々苦勞して実践していることを拝聴し、今後の自分の授業づくりへの示唆が多くあったと感じました。
- ・実践について実際に指導されている先生方から聞くことができとても有意義な時間でした。
- ・先生方が実際の現場に立つことで初めて気づくことができた視点について知ることができて、有意義であった。また、自分も実習等で活かせるようにしたいと感じた。

3 教育現場で役立つ実践的な内容だったか



〈ご意見〉

- ・とても有意義な時間でした。また、大西先生の話のまとまりは聞きやすく、実例もあったため、とても面白かったです。
- ・とても有意義で、自分自身の教育に対する考えが深まりました。
- ・さまざまな考えに触れ、有意義な時間でした。モチベーションも上がりました。
- ・他の分科会の資料等も見たいと感じた。

<第4分科会（中高英語） 記録> 司会：遠藤 あゆみ、松橋 七星

参加者 一般2名、在校生17名、本学教員5名、計24名

第4分科会では、本学准教授 熊谷 摩耶先生による講演と質疑応答が行われた。

「ステレオタイプの根源を探る～視覚資料から得られる日本イメージ」

熊谷 摩耶（東北福祉大学教育学部 准教授）



ご講演いただいた熊谷摩耶先生は、中等教育専攻英語科コースにおける異文化理解の分野を担当されている。これまで主に比較文化学、東西文化交流史、異文化理解について研究を続けてこられた。ご講演では、様々な画像や動画資料を取り入れながら日本のステレオタイプの変遷を紹介し、異文化理解における多角的視点の重要性に関してご講演いただいた。

<質疑の様子>

質疑応答では、海外から見た日本人へのイメージに対する質問が多かった。熊谷先生はご自身の海外での経験や講演内容をもとに回答した。主な質疑応答は以下の通りである。

「今まで経験した外国人とのミスコミュニケーションは？」という質問に対し、熊谷先生は海外での研究活動の経験をもとにイタリア人に対して持っていたステレオタイプの例を挙げ、「イタリア人はよく話すというイメージを持っていましたが、人によって様々で、実際はそうでもない人もいました。このような認識によって起こり得るミスコミュニケーションを防ぐには、ステレオタイプに惑わされずに個人を見ることが大事です」と回答された。また、ご講演で紹介された19世紀の万国博覧会に関連し、「2025年の大阪万博で海外から見た日本人に対するイメージはどのように変化すると思いますか」という質問がなされた。熊谷先生は「展示内容にもよるが、いずれにしても講演で紹介したような強い日本というイメージは出せないのではないかと思います」とお答えになった。

次々と活発に質疑応答が行われ、熊谷先生のご講演を通して、異なる文化的背景を持つ人々がどのように共生していくかという問題について深く考えさせられ、多角的視点を持つことの大切さを実感することができた。

<感想>

熊谷先生のご講演では、19世紀から現在にいたるまでの海外から見た日本に対するステレオタイプを様々な風刺画や動画を通して見ていくことで、その時々々の社会情勢により日本に対するステレオタイプが変化していく様子がわかった。この講義を通して、異文化理解において多角的視点を持つことがより一層重要であることを学んだ。また、自分たちが将来教育の現場で英語を指導していく際に、私たちとは異なる英語圏の文化への理解を深めていくには、全体に対するステレオタイプのイメージにとらわれずに個人を見ていくことが大切であることを肌で感じた。今後こうした問題についてしっかり考えながら、教師として求められる力を身につけていきたい。（2年 野村 和輝）

ステレオタイプの根源を探る

～視覚資料から得られる日本イメージ～

熊谷摩耶（東北福祉大学 教育学部 教育学科）

1. 学習指導要領にみる外国語学習の目標

中等教育に携わる英語教員の指導に求められている、生徒たちの外国語の学習到達目標、中でも異文化への理解について求められている点は何であろうか。中学校学習指導要領（平成29年告示）第9節第1款目標(3)では「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」とある。また、高等学校学習指導要領（平成30年告示）第8節第1款目標(3)では「主体的に自立的に外国語を用いて」とあり、その他は中学校学習指導要領と同一であり、両者共に目標はさほど変わっていない事が確認できる。では、ここでいう「外国語の背景にある文化に対する理解」を生徒たちに促すために、どのような視点を教員は求められているのだろうか。

中学校・高校両方の学習指導要領解説では、以下のように記されている。「「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら」コミュニケーションを図ることが大切であり、その一つとして相手の外国語の文化的背景によって「配慮」の仕方も異なってくるのが考えられるためである。併せて、外国語の学習を通して、他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てることも必要である。」（中学校 p.19、高校 p.26）。つまり、相手に配慮したコミュニケーションを図るための英語を教えること、そして「多面的思考」が行える生徒を育てる要請があるという事である。円滑なコミュニケーション方法、ならびに「多面的思考」とは何かという点を教員自身も培う、もしくは知っておく必要もあると考えられる。

異文化を背景にもつ他者とのコミュニケーションを行うにあたって、必要な姿勢や知識は多様であるが、中でもステレオタイプと実像の隔たりが異文化衝突を引き起こすとされている。例えば、ステレオタイプにとらわれ、個としての相手を見れずミスコミュニケーションを引き起こすという問題点がある。そもそもステレオタイプとは何であるのか、またその成り立ちを教員が知っておくことは外国語でのコミュニケーションにおいて必要な知識ではないだろうか。

2. ステレオタイプの形成過程とその具体例

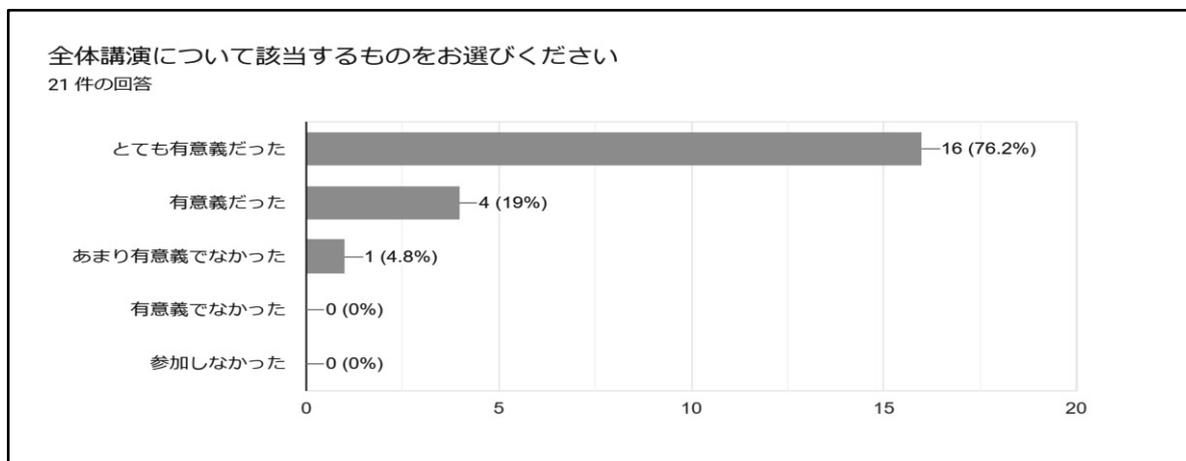
ステレオタイプとは、歴史的な出来事が発生することで、古いステレオタイプに代わった新たなステレオタイプが作り出され、再展開するとされている（ロバート・G・リー著 貴堂嘉之訳『オリエンタルズ—大衆文化のなかのアジア系アメリカ人』（岩波書店、2007）p.vii参照）。すなわち、ステレオタイプは時代や何かしらの出来事によって変化していく不安定な、しかし絶えず新たに生まれ続けるものであるという事である。

では、日本はこれまで主に欧米圏では、時代によっていかなるイメージを持たれてきたのであろうか。そして、何をもってそのようなステレオタイプが形成されてきたのであろうか。今回の講話では日本を事例として取り上げるが、教員や生徒が日本文化をルーツに持っているとは限らず、むしろそうではないケースも多く観察される。英語という外国語を日本で教える教員が、他者からの視線を意識し、ステレオタイプの形成の過程を知っているということが多角的な視点獲得の一助となればと考えている。

そこで、今回の講話では主に欧米圏で表象されてきた日本に関するステレオタイプに焦点を当て、19世紀から現代までの流れを簡潔に紹介する。紹介にあたっては、19世紀の風刺雑誌、万国博覧会、ジャポニスム、映画などの視覚的資料を用いつつ、具体的な例を挙げてステレオタイプの変遷を確認したい。

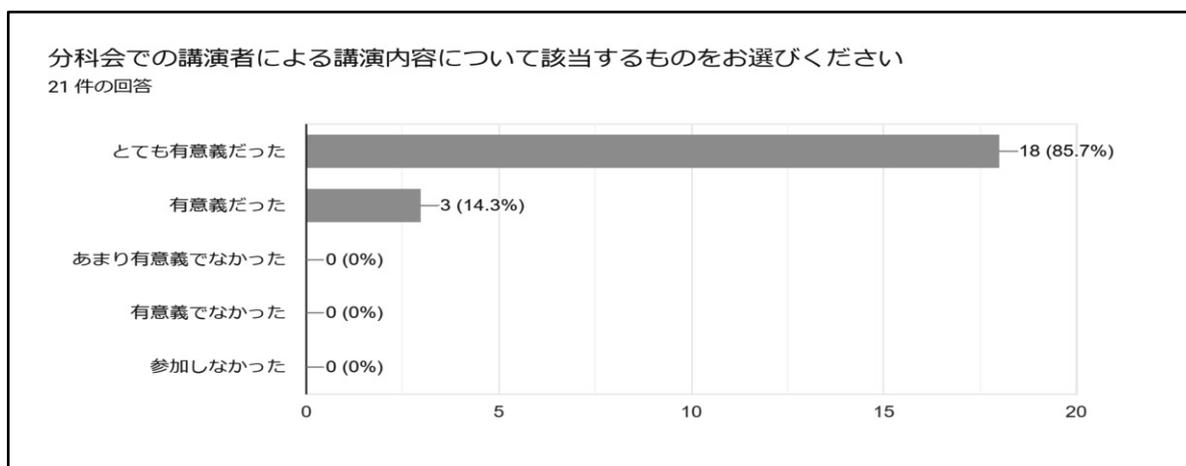
第4分科会（中学英語）アンケート結果

1. 全体講演について（21件の回答）



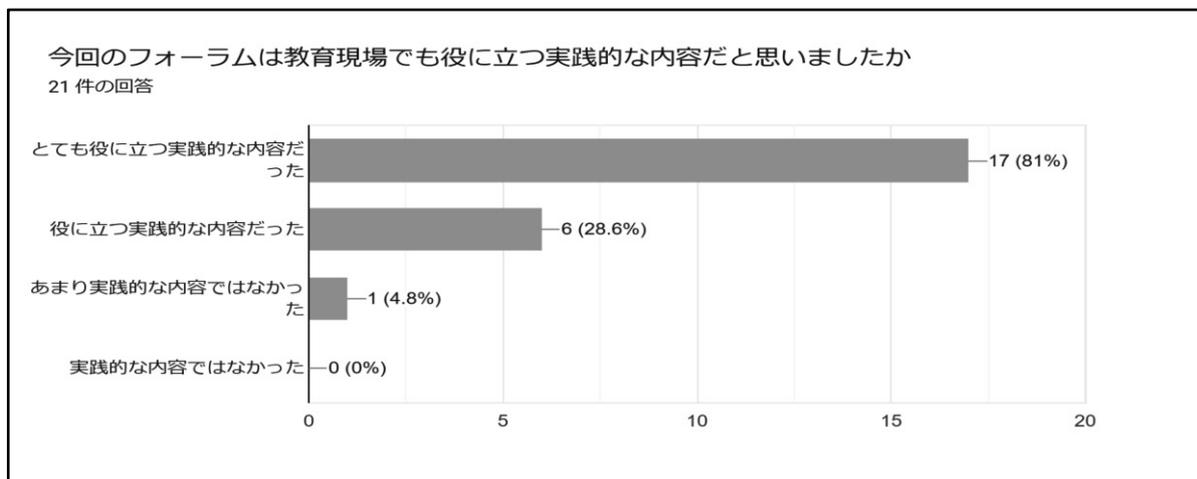
- ・特別支援学校の教育実習が終わったばかりだったので、個別最適な学びについて、さらに深く考えることができ良かったです。
- ・現代における個別最適な学びとはどのようなものを改めて考えさせられて良かったです。また自分自身が教員になったら経験しそうな場面を考えさせられて教員になる前に色々準備していきたいと思いました。
- ・特別支援教育への見方が変わってきていることを、教科書の表記の例などから知ることができ、有意義な機会となりました。
- ・具体の指導事例、考え方まで丁寧にお話しいただき、分かりやすい内容でした。初任の先生方にも聞いてもらえると良いと思えるお話でした。
- ・自分が身に付けた知識を自分の中で留めておくのではなく、伝えられる瞬間を察知し子どもたちに伝える必要性を学びました。また、支援のし過ぎをしないよう心がけていきたいと感じました。

2. 分科会での講演者による講演内容について（21件の回答）



- ・ 普段の授業では聞けないような内容で、よりステレオタイプに対する知識や意識が変化しました。また、最近の映画では無理に有色人種を使っていて、私も熊谷先生と同じように物語を重視し、無理に有色人種を配置するべきではないと思いました。昔の日本に対するステレオタイプと現在の日本に対するものでは、大きく違う点がありませんと感じました。これから世界的な差別がもっと少なくなるように、生徒に正しい知識を教えられるようにもっと異文化理解を深めようと思いました。興味深いお話、ありがとうございました。
- ・ ステレオタイプを中心の講義から考えを深めることができました。我々が常に抱えているステレオタイプのみで判断するのではなく、一個人と接する場合は個人としては対応していくことが必要なのかなと思いました。
- ・ 大変面白く聞くことができました。児童生徒に英語の授業を通して、どう多角的な視点をもてるように育てるのか、新たな課題、視点をいただき感謝しております。
- ・ ステレオタイプを持つことは悪いことだと思っていましたが、それを持つことによって人々の安心感に繋がったりする部分があり、一概には悪いとは言えないのかなと思いました。
- ・ 自分の考えにこだわらず、多角的な視点を持って物事を捉えられるようになり、それを子どもたちに正しく伝えられるようになりたいと感じました。
- ・ 異文化とステレオタイプについての知識がついたと思います。個人的な見解としてはもうステレオタイプはなかなか払拭できるものではないので個々のステレオタイプを大事にして理解できたらいいと思いました。

3. 今回のフォーラムは教育現場でも役に立つ実践的な内容だと思うか (21件の回答)



- ・ 最初の大教室でのお話も、今の教科書との変化を知ることができ、とても有意義な会でした。参加して良かったです。
- ・ 貴重な講演をありがとうございました。
- ・ 教育フォーラムはとても有意義な時間でした。これからの教育について深く考えることができ、教育学という学問を極めていきたいです。
- ・ とても有意義な時間であり、今後も参加したいと感じました。

<第5分科会（特別支援） 報告>

司会：床井洋太

参加者 計 79 名



1. 伊藤拓磨先生（令和元年度卒） 伊藤先生は、「ウェルビーイングの向上」をテーマに、学びを保証し、児童が幸せや生きがいを感じるための土台となる学級活動での実践を紹介した。児童と教員が関係性を築き、考えや思いを受け止める教育により、児童に思いやりの心が育ち、ウェルビーイングの向上に繋がるとの視点から、個別最適な学びと協同的な学びの一体化がなされた教育実践であった。

質疑の様子

「実践では、係活動を『会社活動』としていたが、会社ごとに支給された「給料」は何に使えるのか」という質問に、縁日（お楽しみ会）の飾り付けや、その後の会社活動で使う物品購入費用とし、児童に還元していると述べた。また「定期的な個別面談によって児童はどう変化したか」という質問に、個別面談により児童との信頼関係のより強くなり、教員の指示が通りやすくなったと述べた。



2. 佐藤奈々先生（平成30年度卒） 佐藤先生は、特別支援学級担任、通級指導教室担当、特別支援教育コーディネーターとして取り組んだ特別支援教育の充実のための実践を述べた。個別に支援が必要な児童に対し、児童一人ひとりに適した支援を実施することを目指し、教員間のケース会議による情報共有、保護者支援、児童の交流及び共同学習など多くの人が関わって児童を支えていく支援体制の構築に向けての取組を紹介した。児童が生活しやすい、学びやすい環境づくりをしていた。

質疑の様子

「最も困ったこと、学びが深まったことは」という質問に、支援の方向性を決める際に意見をすり合わせることの難しさを挙げ、児童の意見を聞いて支援の方向性を決め、それを教員間、支援機関に共有する取組を述べた。学びが深まったことは、国立特別支援教育総合研究所の研修で特別支援教育に携わる全国の教員と交流したことと述べた。また「教員から子どもへの働きかけにより思いやりの気持ちを育てるためにはどうすればいいか」という質問に、交流及び共同学習の例を挙げ、教員の関わりを最小限にし、まずは児童自身で思いが伝わらないという経験をし、どうすれば思いが伝わるかを試すことが児童にとって一番の学びになり、思いやりの気持ちを育てることに繋がると述べた。

感想

本分科会を通して、特別支援教育では、どんな力をつけられるか、どんな思いを育めるかを意識し、児童自身や保護者がどんな支援を望むのかを大切に、児童の実態にあった教育的支援を行うことが大切であると分かった。発表した二人の先生方のように、学びと実践を積み重ね、共生社会の一端を担う専門性のある教員になりたいと思った。（3年 高塚萌寧）

秋保かがやき支援学校との出会いと学び

～豊かな関わりを通して思いやりの心を育み、一人一人のウェルビーイング向上を目指して～

宮城県立秋保かがやき支援学校 伊藤拓磨（令和元年度卒）

1. テーマ設定の理由

高校3年生の時、特別支援学校との交歓会をきっかけに、教員になることを志した。小学校での勤務経験を経て、現在、新設校である秋保かがやき支援学校で勤務することになった経緯や、多様な児童生徒と関わってきた中で大切にしている思いと学びを、これまでの出会いと実践経験をもとに話題の一つとして提供できればと思い、本テーマを設定した。

また、辻誠一教授のゼミに所属していた大学生時に「温かい目と手と心」という考えに感化され、「思いやり」を自身の大きなテーマとしてこれまで教員としての人生を送っている。そのような中、第4期教育振興計画のコンセプトにもある、「ウェルビーイング」という言葉を近頃よく耳にするようになった。

子供一人一人の学びを保障し、多様な個人それぞれが現在進行形で幸せや生きがいを感じるための土台作りを目指して行ってきた取組を紹介していく。

2. 発表内容 ※考えの視覚化した図（右図）

◆小学校で行った実践

- (1) 子供目線で日頃から関わりをもつ
 - ・分け隔てない日常の会話
 - ・定期的な個別のヒアリング
- (2) 児童主体の活動
 - ・学級目標の作成と月ごとの振り返り
 - ・会社活動
 - ・共同的な学び（ICTの活用）

◆秋保かがやき支援学校との出会いについて

(1) きっかけ

初任校である小学校で、特別支援学校で10年以上の勤務経験のある先生と出会い、その先生の特別支援コーディネーターを担いながら、子供と関わる様子や、先生方との日頃のコミュニケーションから心のケアをする姿に憧れ、子供との関わり方や、指導法を掘り下げ、基礎・基本を追求した教育であるとする特別支援教育を特別支援学校で学び、力量を高めたいと考えた。そのような時に、辻誠一教授とお会いする機会があり、「秋保かがやき支援学校」という学校が開校することを知ったのがきっかけである。

(2) 秋保かがやき支援学校について

地域・人・自然とのつながりを最大限に取り入れた学び舎での教育活動を通じて、生涯にわたり一人一人が自分らしく、自分の良さを発揮し、輝き続けられる児童生徒を育成する。また、特別支援学校小・中学部、高等部とともに、軽度知的障害のある生徒を対象とした高等部産業技術科が併せて設置された、県内にはない新しいタイプの特別支援学校として整備された。それらの特徴を生かした、互いの個性を認め合い、インクルーシブ教育を推進している今年度開校した学校である。

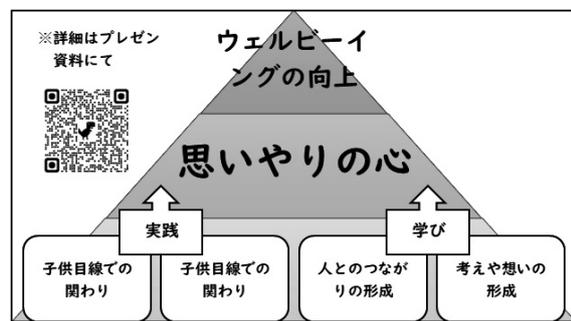
(3) 支援学校での気付き

- ・児童生徒の心理的な安定
- ・小さな変化への気付き
- ・多様な人とのコミュニケーション

3. 考察

子供たちのウェルビーイング向上についてまとめたが、前提として指導者である教員がまず、幸せや生きがいを感じられる状態であることが一番であるとする。自分自身が心に余裕を持ちながら、身の回りの多様な人たちとのつながりや関係を築き、コミュニケーションを取ることで、子供たちに対しても思いやりの気持ちを持って関わりができるようになることを考える。そのような姿を見せていくことが前提として必要なことの一つなのではないだろうか。

予測不可能なこの時代とはいえ、これから生きていく子供たちは、たくさんの人や考え方などに出会っていく。その中で、「思いやり」の気持ちを持って行動することが、一人一人の心の成長につながり、どのような場面でも柔軟に対応していけるような人になれると考えている。これらの実践や考え方がその土台作りになればと考えている。そして、何か一つでも自身の芯となる考えや思いを持って子供たちと関わり、児童生徒に身に付けさせたい力を育むことにもつながるのではないだろうか。



特別支援学級や通級指導教室での実践と学び
～若手の特別支援教育コーディネーターとしての役割～

山元町立坂元小学校 佐藤 奈々（平成31年度卒）

1. 実践の背景

本校は全校児童77名の小規模校であり、通常の学級が6学級、特別支援学級が3学級、通級指導教室が1教室の設置されている。通常の学級の中にも発達障害の診断を受けている児童もおり、指導上配慮が必要な児童はどの学級にも在籍していることから、本校の教職員において特別支援教育への理解を深める必要があると考える。

若手の特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任、通級指導教室担当として、本校の特別支援教育の充実に向けて実践してきたこととその学びを整理し、特別支援教育に関する専門性の向上に向けた取組を考察していきたいと考え、本主題を設定した。

2. 実践の方法・内容

(1) 特別支援教育コーディネーターとして校内支援体制の構築に向けた働き

個別に支援が必要な児童に対し、児童の目標を共有し、児童一人ひとりに適した支援を実施することができるよう努めている。校内での取組の例を報告する。

- ① 個別に支援が必要な児童に対してのケース会議
- ② 特別支援教育研修・「特別支援教育通信」
- ③ 交流及び共同学習

(2) 特別支援学級担任として自立活動の実践

特別支援学級には知的障害種、肢体不自由障害種、自閉症・情緒障害学級にそれぞれ1名の児童が在籍している。自立活動の取り組みとして2つの事例を報告する。

- ① 知的障害学級対象児：小学校4年生A児（令和4年度学級担任）
- ② 自閉症・情緒障害学級対象児：小学校2年生B児（令和5年度学級担任）

(3) 通級指導教室（言語障害）担当としての取組

言語障害通級指導教室における指導内容や保護者支援の事例を報告する。

- ① 指導について 通級指導対象児：構音障害、吃音、言語発達の遅れ、その他
- ② 保護者支援について「親の会ノート」を通じた保護者との情報共有

3. 考察

(1) 宮城県において指導力のある中堅教員となるために

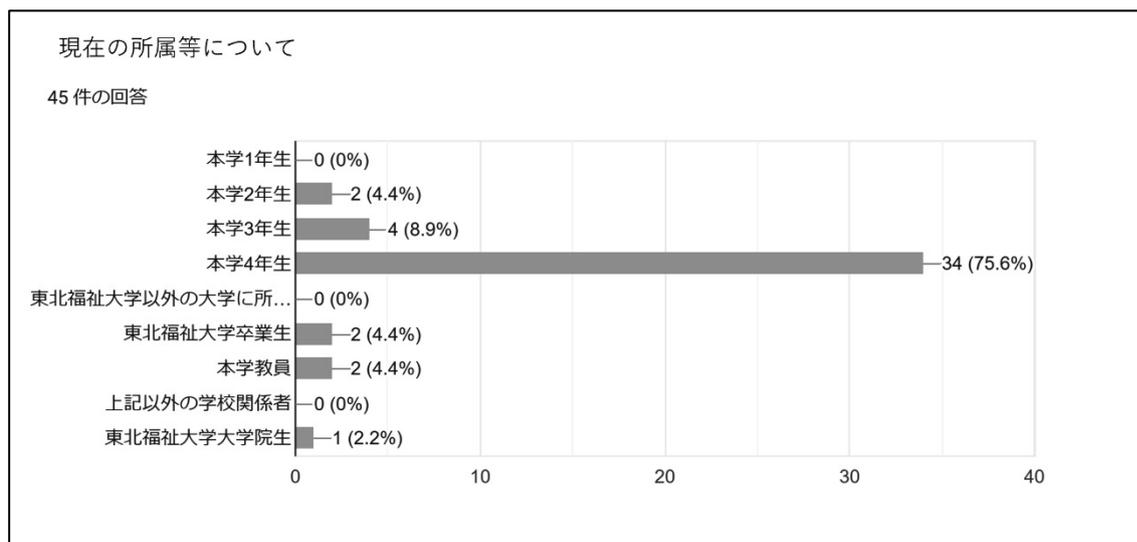
目の前の児童と向き合い実践を積み、研修で知り得た知識をアップデートし続け、理論と実践の備わった教員となることができるように自己研鑽に励んでいく。

(2) 専門性の向上、校内の特別支援教育への理解へ向けて

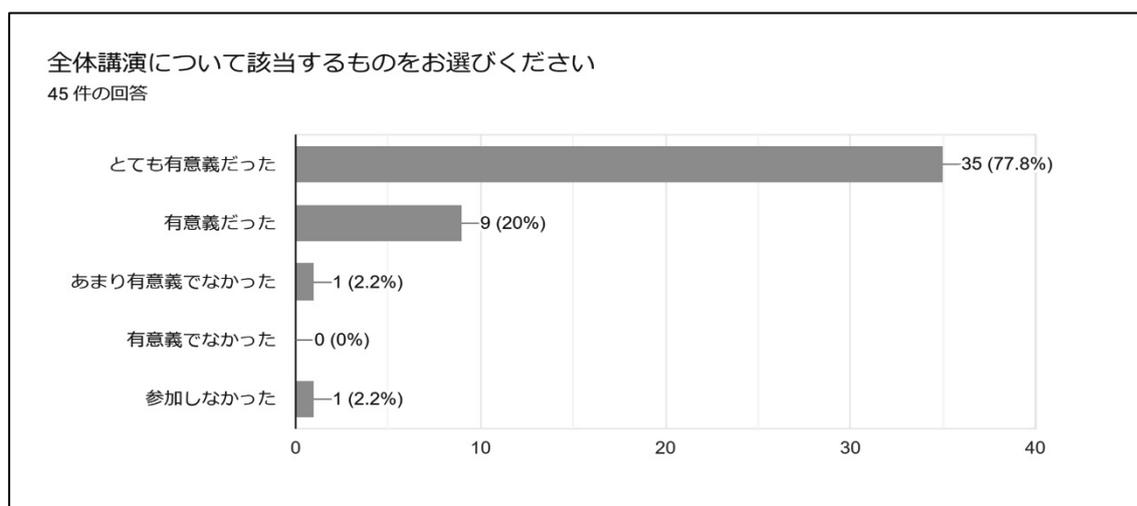
自らが計画・立案して特別支援教育についての研修を行うことができる教員となり、特別支援教育を中核に据え、教育的ニーズのある児童や研修を必要とする教職員に貢献していきたいと考える。

〈第5分科会 アンケート結果〉

〈1. 所属等について〉



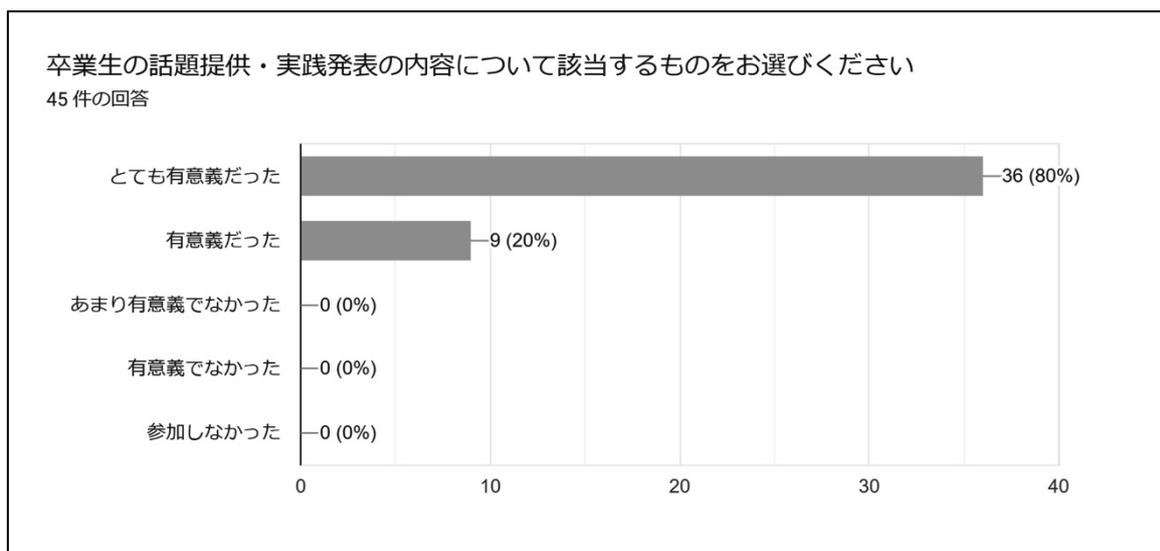
〈2. 全体講話の感想について〉



〈3. 全体講演の内容についての意見・感想〉（14件の回答）

- ・ 生きた経験を聞けることがすごく良かった
- ・ 専門教科を教えることだけが教員の役割ではないのだと再認識できた講演でした
- ・ 大西先生がお話された内容と石川倉次の「啞生の希望」の関連を知り、時代が変わっても、教育として大切なことや追い求めていくべきものといった根本的な部分は変わらないということを学びました。「個別最適な学び」と「協働的な学び」についても同様に、根本的な部分は同じなのではないかと考えます。
- ・ 一人一人が分かる授業と支援を行うことができる教員になりたいと思いました。
- ・ 全ての子どもたちの可能性を引き出すことは、障害の有無や生まれも育ちも関係なく、一人一人の子どもたちが輝くことができる教育の大切さが分かった。
- ・ テレビドラマからも、たくさんの方ができるといふ、とても良い学びになりました。

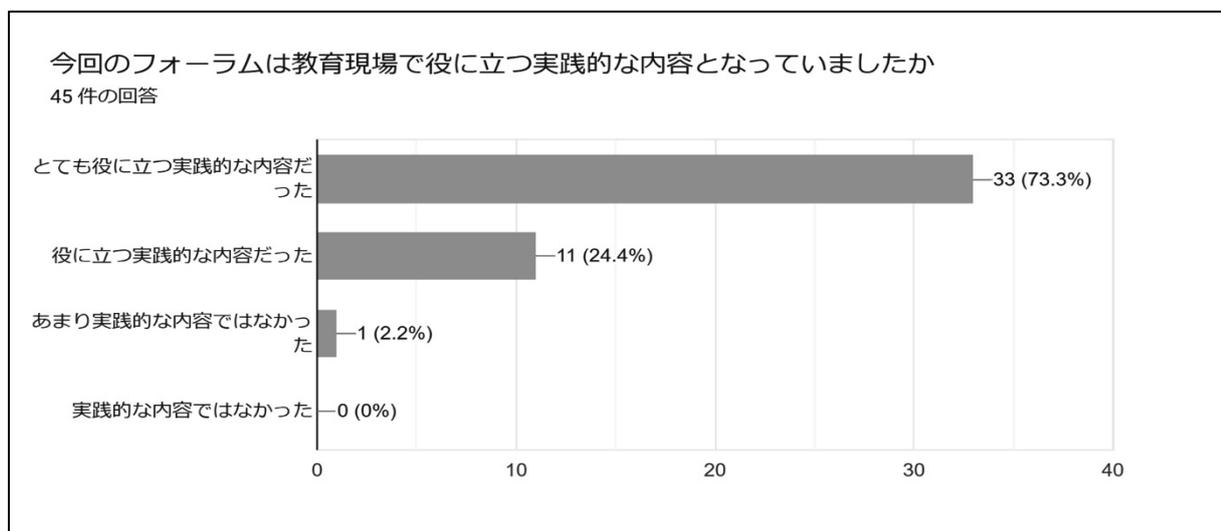
〈4. 卒業生の話題提供・実践発表について〉



〈5. 卒業生の話題提供・実践発表についての意見・感想〉 (14件の回答)

- ・将来は特別支援学校で働きたいと思っているので、実際に特別支援に関わっている方の話を聞いて有意義な講演でした。具体的な例も示してくれて、とても勉強になりました。
- ・実例を元に個別最適な学び、協同的な学び、ダイバーシティとインクルージョンの理解が深まりました。また、特別な支援が必要だとしても主体性を児童に持たせることや自己肯定感をあげていくことが大事だと分かりました。

〈6. フォーラムの内容の教育現場で有用性について〉



〈7. フォーラム全体についての意見・感想〉 (14件の回答)

- ・自分が教師として学級に配属された時のことをイメージしながら聞くことが出来ました。時間の制約が惜しいと思うくらい有意義な内容でした。
- ・講義や特別支援教育の論文をネットで検索したりして学んでいたが、現場での実際行われている教育について話を聞く機会がなかったため、このような機会を設けて貰えて良かったです。

まずは、今年の教育フォーラムが話題提供者の皆様、教職員、学生実行委員、関係各位のご協力のもと、無事に終えることができたことに感謝申し上げます。昨年度は、まだコロナ感染収束途中ということもあり、全体での行事は行わず分科会毎に講演や研究発表を行い、更にフォーラムの様子をオンラインで同時配信するというハイフレックス形式で行われました。今年度は対面での開催を基本として、全体での開会行事と全体講演を行い、分科会の発表内容は録画で視聴できるようにするという方法をとりました。参加人数は 460 名(うち、学外一般参加者 52 名)と、昨年度と比較してオンラインでの参加が無くなった分は減少、また一般の当日参加者がやや少なかったようですが、お陰様で成功裏に終了することができました。

実行委員長としての立場から、今回の TFU 教育フォーラムの準備・運営をおおまかに振り返り、成果や今後の課題等について記したいと思います。

1 「TFU 教育フォーラム 2024」開催形式について

第 1 回実行委員会を 5 月下旬に行い、今年度の開催形式について話し合いました。新型コロナウイルス感染もある程度収束した状況にあり、基本的に対面での開催を決定しました。

開会行事については全体講演を復活することとし、今年度は学内からの講師ということで教育学科長の 大西孝志先生にご依頼しました。講演では幼小中特の幅広い層に向け、現在の教育課題について示唆あるご講演を頂きました。次年度は学外からの講師を招くという方向も検討課題になるのではないかと思います。

分科会については、実践発表を中心に分科会毎に内容を検討し実施されました。全体会があったことで分科会の時間がやや短くなってしまった感があり、全体の時間配分の工夫も必要かと感じました。

映像記録の後日配信については、昨年オンラインによる同時配信よりは準備等の変数は軽減された半面、Meet での録画が機材の不具合で十分できなかったというトラブルも発生したので、録画方法の再検討が必要のようです。また後日録画配信の必要性については、削減してもいいのではという意見もあり、次年度の検討課題の一つであると思います。

2 準備・運営について

教育フォーラムの実行委員の教員が集まったの実行委員会は 2 回の開催のみでした。必要な連絡や相談、報告は学内 Gmail の Chat を活用して行われ、昨年度の実施状況や資料などを委員で共有しながら準備を進めることができました。

学生実行委員会については、各ゼミからの 3 年学生から構成されました。人数がやや少なく一人 2 つの係を担当しながらも、役割を認識してしっかりフォーラムの運営に当たってくれました。今後の学生実行委員会については、学生実行委員を 3 年生だけではなく 2 年生か

らも選出したり，分科会の運営のみならず企画面にも参加させたりなど，学生がより主体的にフォーラムに参加できるような体制を構築していくことも必要なのではないかという提言がありました。

3 広報活動，参加者数の増加に向けて

本学の1年学生にはリエゾンゼミⅠの担任を通してチラシを全員に配布しましたが，参加した学生がいなかったのは残念でした。教育学科の取り組み・特色として教育フォーラムの開催を入学希望の高校生に宣伝していることも踏まえ，1年次から教育現場の実践に触れる機会を持たせること，例えばリエゾンゼミⅠの学習計画などに教育フォーラムへの参加の機会を取り入れてもらうことなど，今後工夫が必要ではないかという提言がありました。

卒業生については，各ゼミ担当教員からの連絡や同窓会からのOB一斉メール等で，フォーラム開催の情報を発信していただきました。しかしながら卒業生の参加が伸びていない現状がありますので，今後さらにゼミ担当教員と卒業生とのつながりを太くし，卒業生のリカレントの機会として積極的に参加を働きかけていく必要があると感じました。

一般に向けての広報としては，PR課にご尽力を頂き，今年度初めて河北新報にフォーラム開催の記事を掲載して頂きました。参加者の増加につながったかどうかは分かりませんが，このような宣伝活動は今後も続けていきたいと思えます。

今年度の教育フォーラムはコロナ収束後の対面形式での開催となり，新しい時代に即したフォーラムの実現に近づく着実な成果を挙げたのではないかと思います。また，今年度のテーマ「個別的な学びと協働的な学びの一体的な充実」についても，それぞれの現場での実践の成果が報告され，今後の学校教育の方向性を模索するヒントがたくさん得られた素晴らしい機会になったと思います。次年度は本学の開学150周年の年でもあります。本フォーラムが学内外に開かれた学びの場として，さらなる発展を遂げますことを願っています。

末筆ながら，貴重なお話を賜りました講師・講評の先生方，保育や教育現場での研究，実践をご提供頂いた発表者の皆様に対しまして，改めて感謝申し上げます。少ない打合せの中でも積極的にフォーラムの運営に頑張ってくれた学生実行委員の皆さんもお疲れ様でした。次年度以降もTFU教育フォーラムに対する一層のご理解・ご協力をお願い致しつつ，御礼のご挨拶とさせていただきます。

学生実行員名簿

本教育フォーラムは、各ゼミ代表者から選出された学生実行委員によって10月に学生実行委員会が立ち上げられ、多くの係を分担し運営されました。

	担当・係	担当実行委員		所属ゼミ	備考
開 会 行 事	学生実行委員長	22ET029	及川翔太	加藤ゼミ	開会挨拶
	学生副実行委員長	22ET182	三塚楽人	河合ゼミ	司会進行
	一般参加者受付	22ET040	尾形唯月	上條ゼミ	受付
第 1 分 科 会 幼 保	分科会受付	22ET124	高野心々音	青木ゼミ	
	会場内誘導	22FS174	柵山珠丹	山崎ゼミ	
	司会	22ET161	馬場彩花	石森ゼミ	
	タイムキーパー	22ET062	菊地美玖	上村ゼミ	
	記録	22FS301	西彩奈	君島ゼミ	記録、報告書データ作成
		22FS274	千葉 百華	平川ゼミ	
ICT	22ET176	堀江凜菜	高野ゼミ	映像記録	
第 2 分 科 会 小 A	分科会受付	22ET029	及川翔太	加藤ゼミ	記録係も兼務
	司会 タイムキーパー	22ET058	金崎史晟	佐藤ゼミ	
		22ET147	長沢碧月	伊勢ゼミ	
	記録	22ET130	滝田敬大	加藤ゼミ	報告書データ作成
ICT	22ET034	大場凜	白井ゼミ	映像記録	
第 2 分 科 会 小 B	分科会受付 記録	22ET148	中田遼聖	菅原ゼミ	分科会内容記録、 報告書データ作成
		22ET089	齋藤耀志	今野ゼミ	
	タイムキーパー	22ET198	遊佐麻衣	三浦ゼミ	事前の受付, 誘導 も兼務
	ICT	22ET088	齋藤ひなた	渡会ゼミ	映像記録

	担当・係	担当実行委員		所属ゼミ	備考
第3分科会 中等社会	分科会受付	22ER015	木村颯太郎	富樫ゼミ	
	司会	22ER014	川口輝	下山ゼミ	
	タイムキーパー	22ER013	川口大輝	鍛代ゼミ	受付も兼務
	記録	22ER008	岡崎克祐	朝倉ゼミ	事前の誘導も兼務
		22ER024	佐藤諒	下山ゼミ	報告書データ作成
	ICT	22ER028	多澤香楓	水野ゼミ	映像記録
22ER039		宮本靖也	清宮ゼミ		
第4分科会 中等英語	分科会受付	22ER028	野村和輝	高橋ゼミ	記録も兼務
	誘導	22ER038	真壁輝一郎	久保田ゼミ	事前の誘導も兼務
	司会	23ER038	松崎七星	高橋ゼミ	
	タイムキーパー	22ER006	遠藤あゆみ	久保田ゼミ	
	記録	22ER029	橋本結花	久保田ゼミ	記録、誘導も兼務
	ICT	22ER041	村田太陽	久保田ゼミ	映像記録
第5分科会 特別支援	分科会受付	22ET024	内海陽奈	黄ゼミ	
	司会	22ET144	床井洋太	大西ゼミ	
	記録	22ET123	高塚萌寧	村上ゼミ	報告書データ作成
	誘導	22ET119	鈴木りな	庭野ゼミ	事前の誘導も兼務
	ICT	22ER021	佐々木耀子	和ゼミ	映像記録

TFU 教育フォーラムのあゆみ

実施月日/参加者数/特記事項	大会テーマ・主な内容等
<p>子ども教育フォーラム 2012 8月18日、参加者：300名</p> <p>卒業生のリカレント教育 として教育フォーラムを 開始</p>	<p>テーマ：つながりのある保育・教育を求めて</p> <p>第1部：基調講演 「教材でつながる、教材をつなげる」 東北福祉大学 西林克彦教授</p> <p>「保幼小連携の枠組み・実際と展開」 神戸大学大学院 北野幸子准教授</p> <p>第2部：ワークショップ「ワールドカフェ in TFU」 担当者：三浦和美（子ども教育学科・教職）</p>
<p>TFU 子ども教育リカレント 講座 2013 10月19日、参加者：150名</p> <p>分科会形式の運営を開始</p>	<p>第1部：記念講演 「考えてみよう 眠りのこと ～どんな時に眠くて、どんな時に眠く ない?～」 東北福祉大学 水野康准教授</p> <p>第2部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：小石川秀一（子ども教育学科・教職）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2014 10月11日、参加者：155名</p>	<p>第1部：記念講演 「算数のたのしさ」 東北福祉大学 石原直教授</p> <p>第2部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：土生昭文（子ども教育学科・教職）</p>
<p>2015年4月 教育学部教育学科・大学院教育学研究科発足により共催実施</p>	
<p>TFU 教育フォーラム 2015 10月3日、参加者：800名</p> <p>初めて中央講師迎え開催 学科と大学院共催を開始</p>	<p>第1部：記念講演 「子どもも大人も居心地の良い学校、家庭、地域社会をめざして」 教育評論家・法政大学教授 尾木直樹先生</p> <p>第2部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：熊谷和彦（初等教育専攻・小学校）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2016 11月6日、参加者：390名</p>	<p>第1部：講演 「特別支援教育の動向」 東北福祉大学 大西孝志教授</p> <p>第2部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：熊谷和彦（初等教育専攻・小学校）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2017 10月14日、参加者：100名</p>	<p>第1部：講演 「空がこんなに青いとは わたしの初人験」 東北福祉大学 土生昭文准教授</p> <p>第2部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：熊谷和彦（初等教育専攻・小学校）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2018 12月8日、幼保：323名</p>	<p>大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの学びをど う幅広く支援するか</p>

10月6日、教職：174名	大会テーマを設定し各分科会を実施。 中等部会新設。 担当者：今野和賀子（初等教育専攻・小学校）
TFU 教育フォーラム 2019 12月14日、幼保：427名	大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの学びをどう幅広く支援するか 10月12日、教職：台風19号により中止 担当者：浅川俊夫（中等教育専攻・社会）
TFU 教育フォーラム 2020 11月28日	大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの学びをどう幅広く支援するか 新型コロナウイルス感染症拡大により中止 担当者：高屋隆男（特別支援教育）
TFU 教育フォーラム 2021 12月4日、参加者：655名 感染症対策のためオンライン開催	大会テーマ：ポストコロナへの志向 －すべての子どもの確かな学びを目指して－ 5分科会（幼保・小A・小B・中・特別支援）で開催 担当者：渡会純一（初等教育専攻・小学校）
TFU 教育フォーラム 2022 12月3日、参加者：603名 対面・オンラインハイフレックス方式による開催	大会テーマ：ポストコロナへの志向 －すべての子どもの確かな学びを目指して－ 6分科会（幼保・小A・小B・中高社会・中高英語（新設）・特別支援）で開催 担当者：富樫進（中等教育専攻・中高社会）
TFU 教育フォーラム 2023 12月2日、参加者：629名 対面・オンラインハイフレックス方式による開催	大会テーマ：個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して 5分科会（幼保・小A/B・中高社会・中高英語・特別支援）で開催 担当者：杉浦徹（特別支援教育）
TFU 教育フォーラム 2024 12月7日、参加者：439名	大会テーマ：個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して 5分科会（幼保・小A/B・中高社会・中高英語・特別支援）で開催 担当者：加藤 幸男（初等教育専攻・小学校）

以上

編集後記

現在、世界は感染症、気候変動、そして経済的なインフレーションなど、複数の難題に直面しています。特に、インフレの影響は教育分野にも及んでおり、教育資源の確保や施設の維持、デジタル技術の導入など、様々な場面でコストの増加が課題となっています。こうした中で、柔軟かつ持続可能な形で「新しい日常」を創出するための対応が、教育現場において一層求められています。

今年の「TFU 教育フォーラム」では、対面形式を中心に開催されましたが、これまでのハイフレックス形式で培われた知見を活かし、単なる対面開催にとどまらず、Web や ICT 技術を活用した柔軟な形式が随所に取り入れられました。この場を通じ、多様な参加者が教育について意見を交換し、新たな学びを共有する貴重な機会となりました。

本教育フォーラムの開催にあたり、ご協力いただきました講師の皆様や関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

以上

